平戸島中南部における宗教コミュニティの形成

叶　堂　隆　三

はじめに
1　平戸島中南部のカトリック信徒と移住
2　平戸島中南部における信徒の居住の展開
3　平戸島中南部以外への信徒の移動
4　平戸島中南部における宗教コミュニティの形成と展開
5　平戸島への信徒の移動と宗教コミュニティの形成の社会的特徴

はじめに

平戸島（長崎県平戸市）は、一般に生月島とともに江戸期からつづく潜伏キリシタンの島とされる。しかし平戸島北部の信徒の多くは、明治以降に島外から移住した信徒である（叶堂 2015 年ａ）。平戸島中南部でも江戸期からの潜伏キリシタンに加えて、江戸後期・明治期に移住した信徒や明治期に改宗した仏教徒等の多様な信徒層が存在する。

とりわけ興味深いのは、旧紐差村に来住した信徒の中にド・ロ神父の主導で外海地区（長崎市）から移住した信徒集団が含まれる点である。外海地区の出津教会の主任司祭であったド・ロ神父が、条件不利地区で零細農業に従事する信徒の生活剥奪の解消策として、平戸市田平地区・大村市竹松地区・平戸島紐差地区の開拓移住を主導したことによる。

1　平戸島中南部のカトリック信徒と移住

本稿の目的

本稿の目的は、ド・ロ神父主導の移住を含む平戸島中南部への信徒の移住で生じた重層的なカトリック信徒の居住状況と各地区の宗教コミュニティ形成の経緯を解明することにある。具体的には、以下の５点の解明をめざす。

第１に、江戸期・明治期のカトリック信徒（キリシタン）の平戸島中南部の各地区への移住の経緯と状況を可能な限り明らかにすることである。表１のように、旧紐差村等には地元の潜伏キリシタンおよび仏教から改宗した信徒に加えて、江戸期・明治期に移住が生じる。この江戸期・明治期の移住の経緯と、移住を可能にした平戸島中南部の地域状況を把握する。

第２に、明治以降の信徒世帯の居住展開に関して、分家の創出等による居住の展開と信徒世帯の職業状況を把握することである。可能な範囲で大正・昭和期の平戸島中南部内の信徒の開拓移住の状況を明らかにする。

第３に、平戸島中南部に移住・定住した信徒世帯の他出の状況を把握することである。多くのカトリック信徒の移住地で、定住後に集合的移動が生じる平戸島内外への移住の状況の把握をめざす。

第４に、平戸島中南部の各地区における宗教コミュニティの形成の過程を明らかにすることである。明治以降、旧紐差村に長崎教区の外国人司祭が居住し、平戸島・北松地区の宣教拠点とする。こうした外国人司祭が平戸島南部の宗教コミュニティ形成において果たした役割を明らかにする。

第５に、ド・ロ神父の主導の三つの開拓移住地の比較を通して、旧紐差村木ケ津地区坊主畑への移動と宗教コミュニティ形成の社会的特徴を明らかにすることである。

これらの目的に沿って、第２節で、平戸島中南部への信徒の移住の経緯および居住の展開、第３節で、平戸島北部地区および北松地区への中南部の信徒の集団的・連鎖的移動にふれる。さらに第４節で、各地区・集落における宗教コミュニティの形成と展開にふれ、最後の第５節で、平戸島中南部への信徒の移住と居住の展開および宗教コミュニティ形成の社会的特徴を検討し、加えてド・ロ神父主導の旧紐差村への開拓移住の特徴を明らかにする。

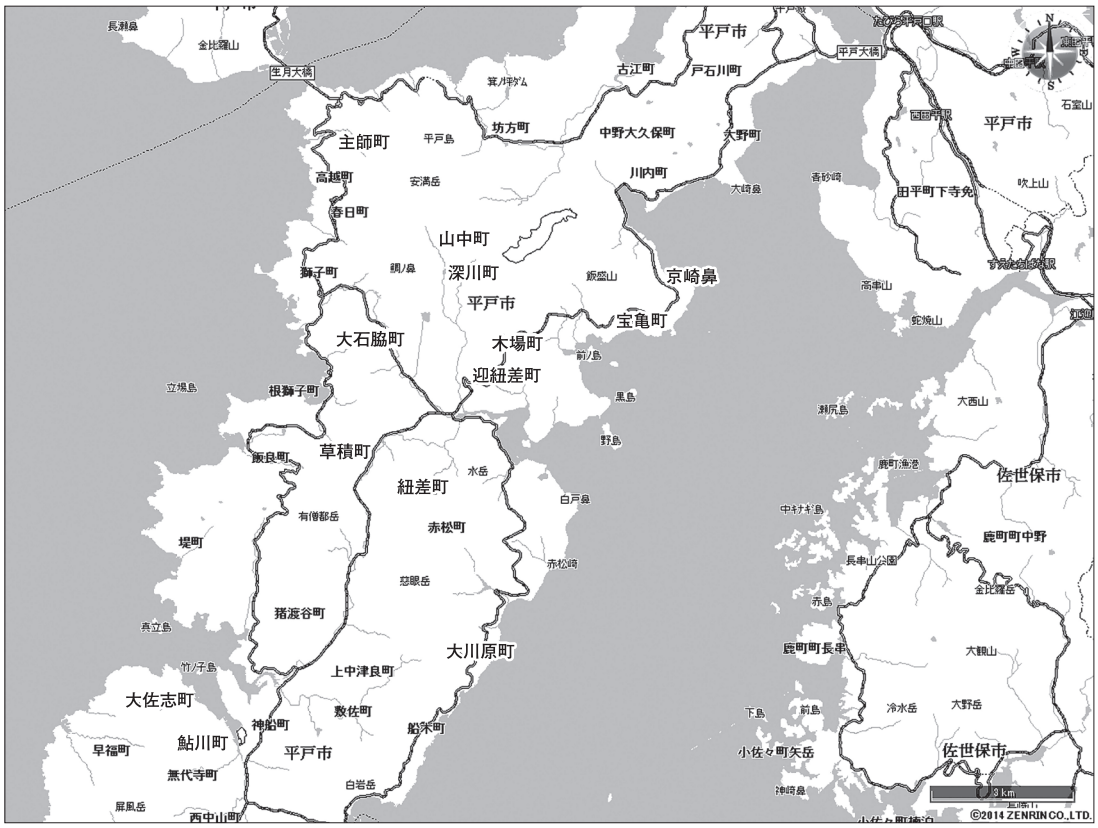


図１　平戸島中南部

表１　平戸島中南部に関する記述の整理

旧村	地区	集落	教会	片岡弥吉		備考	その他文献	浦川和三郎
				出身地	移住時期			出身（地）
獅子村	根獅子		－	－	－			潜伏キリシタン
紐差村	紐差	１～４区	紐差教会	－	－	仏教からの改宗		潜伏キリシタン 大村藩木場 外海
	深川			－	－			
	木場	木場		－	－			
		田崎		外海	明治期	ド・ロ神父		
				－	－	仏教からの改宗		
		神鳥		－	－			
	迎紐差			－	－			
	朶ノ原			－	－	仏教からの改宗		
	木ケ津	坊主畑 赤松崎	木ケ津 （巡回教会）	外海	明治期	ド・ロ神父	ド・ロ神父７町余の山林原野を購入。18世帯97人移住	
	宝亀	今村（雨蘇）	宝亀教会	外海	江戸期			
		京崎		外海	江戸期			
津吉村	古田町	大佐志	大佐志 （巡回教会）	五島	－	＊五島・黒島	明治初期	
中野村	主師町	山野	山野 （巡回教会）	五島	－		江戸期 （文政年間）	
	山中町		中野 （巡回教会）	＊潜伏キリシタン				

注：片岡弥吉『長崎のキリシタン』、浦川和三郎『切支丹の復活後篇』、教会誌等の記載をもとに作成した。
　　備考で「＊」の付いている記載は教会誌・その他における記載である。
　　その他文献のうち木ケ津は『外海町史』、大佐志・山野の記載は『長崎・天草の教会と巡礼地完全ガイド』の記載である。

表 2　平戸島中南部の各集落の農業世帯数

集落		1970年	1980年	1990年	2000年	2010年	集落		1970年	1980年	1990年	2000年	2010年
紐差第１	総戸数	–	–	–	–	85	神鳥	総戸数	22	21	22	23	17
	農家比率	–	–	–	–	3.5		農家比率	100.0	81.0	77.3	52.2	52.9
紐差第２	総戸数	67	56	76	79	68	木場	総戸数	96	66	44	46	38
	農家比率	67.2	71.4	46.1	35.4	35.3		農家比率	47.9	59.1	81.8	65.2	50.0
紐差第３	総戸数	52	54	66	60	34	宝亀第１	総戸数	–	–	–	–	47
	農家比率	44.2	37.0	12.1	11.7	17.6		農家比率	–	–	–	–	8.5
紐差第４	総戸数	45	51	82	94	53	宝亀第２	総戸数	50	54	63	64	56
	農家比率	64.4	52.9	23.2	17.0	20.8		農家比率	78.0	61.1	47.6	43.8	28.6
迎紐差	総戸数	30	33	34	34	31	宝亀第３	総戸数	31	31	37	39	30
	農家比率	93.3	78.8	70.6	61.8	48.4		農家比率	90.3	80.6	51.4	30.8	30.0
深川	総戸数	50	49	51	56	57	宝亀第４	総戸数	40	35	36	33	25
	農家比率	94.0	93.9	78.4	69.6	59.6		農家比率	77.5	68.6	36.1	33.3	32.0
朶の原	総戸数	25	25	26	26	24	主師	総戸数	21	21	20	23	20
	農家比率	84.0	100.0	96.2	96.2	87.5		農家比率	100.0	90.5	90.0	78.3	75.0
草積	総戸数	33	32	32	38	31	山中	総戸数	101	94	109	107	99
	農家比率	90.9	84.4	84.4	65.8	67.7		農家比率	67.3	72.3	53.2	52.3	42.4
赤松	総戸数	28	25	23	25	28	飯良第１	総戸数	50	47	43	42	79
	農家比率	92.9	80.0	87.0	64.0	42.9		農家比率	78.0	68.1	60.5	54.8	16.5
大河原	総戸数	123	108	114	117	109	飯良第２	総戸数	53	53	50	42	40
	農家比率	82.1	86.1	65.8	49.6	26.6		農家比率	86.8	73.6	74.0	71.4	32.5
木ケ津第２	総戸数	46	44	44	45	38	大石脇	総戸数	25	21	26	22	32
	農家比率	95.7	95.5	86.4	75.6	47.4		農家比率	88.0	95.2	65.4	59.1	43.8
木ケ津第３	総戸数	39	35	37	36	31	大佐志	総戸数	58	54	42	41	29
	農家比率	84.6	65.7	54.1	55.6	51.6		農家比率	67.2	61.1	54.8	51.2	48.3
木ケ津第４	総戸数	42	39	30	35	33	鮎川	総戸数	57	61	64	78	147
	農家比率	95.2	59.0	63.3	37.1	24.2		農家比率	59.6	52.5	43.8	34.6	11.6
田崎	総戸数	40	36	38	37	24							
	農家比率	85.0	83.3	76.3	70.3	54.2							

注：『2010 年世界農林業センサス集落カード』（一般社団法人農林統計協会）をもとに作成した。

平戸島の地域状況

長崎県平戸市は、架橋により九州本土（北松浦半島田平地区）と結ばれた平戸島・生月島および離島の的山大島等を市域とする（図 1）。1955 年に平戸島の平戸町と中野村・獅子村・紐差村・中津吉村・津吉村・志々伎村が合併して平戸市が誕生し、さらに 2005 年、田平町・生月町・大島村と合併し、現在の平戸市が誕生する。2016 年現在の人口は約 33000 人、世帯数は約 14200 である。

平戸市の都市機能は平戸島北部の旧城下町・港湾地区の平戸地区に集中し、中南部は主として農業に依拠する。実際、表 2 のように平戸島中南部のいずれの旧村でも農業が主産業である。

2　平戸島中南部における信徒の移住と居住の展開

平戸島中南部（旧紐差村・旧津吉村・旧獅子村・旧中野村）に居住するカトリック信徒の特徴は、多様な入信の経緯や移住状況の信徒の重層である。全体的に、平戸島南部は地下の信徒層（潜伏キリシタン・仏教からの改宗信徒）と江戸後期・明治期の移住（居付き）の信徒の共存といわれる。しかし集落レベルでは、表 1 のように、ほぼ同一の信徒層で形成される集落が多い。その一方で、カトリック信徒以外の住民（仏教徒および非回宗の住民）も多数存在し、信仰関係は複雑である。

平戸島中南部のこうした信仰状況に関して、本節では各地区・集落レベルの居住・移住の状況を整理

表 3　旧紐差村および平戸島中南部（一部）の新田・移住地・開拓地

江戸期前・時期不詳

地名	事項
山ノ田	山林を開墾して田にする。
菅牟田	菅の繁茂地を開墾する。
馬込	元は馬の牧場。
三軒谷	17 世紀中頃、根獅子より 2 世帯来住。
木場	宝亀・迎紐差からの分流が多い。
神取	阿波の藤沢新左エ門が移住する。その後、田崎に分流が居住する。

江戸期（18 世以後）

名称	時期	事項
朶の原	1706（宝永 3）年から数年	小値賀島の小田氏が原野 40 町歩。前川・栗林家が来住してその地を開墾する。
神船新田	1791（寛政 3 年）	生月村の山県三郎衛が築造する。
猪渡谷新田		
迎紐差	1816（文化 13）年	平戸藩の新田事業。萩山九平が関与する。
龍瑞寺新田	文化年間	
伍平新田	1840 ～ 50 年頃	坂本伍平の個人事業。
古田新田	寛政年間～明治 4 年	古田川河口（古田～神船間）、藩の新田事業で神船新田の倍の規模。
鮎川新田	江戸後期	藩の新田事業で、佐志川から現在の鮎川付近。
佐志新田		
宝亀大田新田	1849（弘化 4）年	太田川の開拓地。林栄太郎の築造。
深川	1850 年代後半	川に没する土地を福田豊作が開墾する。

明治期

名称	時期	事項
野島	明治 24 年	田崎の松山氏が平戸村民から購入して開拓する。
坊主畠	明治初期	元は原野。紐差の住民 3 人がこの地を購入し、大村・黒島の信徒に分譲する。
布津原	明治維新期	京都からの移住者久家八左衛門の開墾地。
大河原第 1 耕地整理組合	明治 45 年	溜池築造による開田を行う。

注：『紐差郷土誌』（1918 年）・『平戸大河原郷土史』（1984 年）・『平戸市中南部史稿』（1978 年）・『津吉地区郷土史』（2003 年）等をもとに作成した。

する。まず江戸期以降の平戸島中南部の新田開発・山林開墾の歴史を通して開拓移住地という平戸島中南部の地域特徴を明らかにする。次に各地区・集落への島外の信徒の移住と居住の展開を明らかにする。

平戸島中南部の地域状況

昭和 40 年代の国道 383 号線の舗装整備および平戸大橋の開通によって平戸地区・北松半島の通勤圏になる以前、平戸島中南部の大半の世帯は農家であった。しばらく後の 1970 年の各集落の農家世帯率（表 2）から各集落の大半の世帯の農業従事が裏づけられる。

しかし、旧紐差村中央部の安満川・深川川の両岸に「全島唯一の平地……を総称して朶谷とぞ言う」（紐差村郷土誌 72 頁）平野が存在する紐差地区でも農地の多くは、実は、新田開発や開拓地である。表 3 は、旧紐差村等の江戸期・明治期の主な新田・開拓地および耕作状況である。古い移住地・開墾地のうち山ノ田は山林、菅牟田は草地の開墾地、三軒谷は旧紐差村外からの移住地である。

草積地区の馬込は馬の牧場の跡地で、江戸後期・明治初期に平戸藩の各牧場の開墾や売却があったため、開墾地の可能性が高い。木場地区の木場・神取はかなり古い時期の移住で、木場は宝亀・迎紐差からの移住、神鳥は阿波からの移住といわれる。

18 世紀には、紐差地区の原野の朶の原が五島列島小値賀島の住民によって開発され、他地区の住民（小作）が開墾入植する。また旧津吉村の神船新田と旧中津吉村の猪渡谷新田が生月村の住民によって開発される。

さらに、江戸後期（19 世紀以降）に平戸藩は新田開発を推進し、江戸末期に藩の牧場の廃止と山林原野の開拓を奨励する（藩史大辞典第 7 巻九州編

187-188 頁)。その結果、平戸中南部に新田が数多く開発される。紐差地区では迎紐差・龍瑞寺新田・五平新田が、平戸藩あるいは個人によって開発される。さらに宝亀地区で宝亀大田新田、旧津吉村で古田新田・鮎川新田・佐志新田が開発される。同時期に深川地区で河川の水没地が開墾され、乾田作業が行なわれる（紐差村郷土誌 66-78 頁)。

明治以降、木場地区の田崎沖の野島や木ケ津の坊主畑・大河原町布津原で開墾が進む。野島は田崎地区の住民の私費開墾で、布津原は明治維新後、京都出身者の開拓である（紐差村郷土誌 78 頁・82 頁)。布津原では、本村から移住した数世帯が明治中期に 10 数世帯に増加する（平戸大河原郷土史 15 頁)。

大正期の旧紐差村の営農状況が、新田開発・開墾に伴う移住の状況を物語る。すなわち、自小作の比率は田の自作 44.6%・小作 55.4%で、多くの世帯の生活の基盤は小作である。一方、畑は自作 92.3%で、大半が開墾・開拓地と推測される。また厳しい営農状況を反映して、旧紐差村の住民の生活状況は上 7.4%・中 15.3%・下 77.3%という状況である（紐差村郷土誌 197 頁)。

なお、平戸島中南部では、大正・昭和期以降にも開拓が行われる。表 4 のように、平戸島中南部の山間地や半島の丘陵地では、大正・昭和初期以降も開墾助成法および自作農創設特別措置法の対象地として開拓が進められる。

表 4　大正・昭和初期の平戸市中南部の開拓地

大正・昭和初期

名称	旧村名	世帯数
飯良第一耕地整理組合	獅子村	4
飯良第二耕地整理組合		7
獅子免耕地整理組合		2
根獅子耕地整理組合		4
田崎耕地整理組合	津吉村	1
赤石ノ久保耕地整理組合	中津良村	1
大川原第二耕地整理組合	紐差村	1

戦後期

名称	旧村名	入植世帯数	1960年世帯数	1965年世帯数
小富士	中野村	5	16	2
古江		5		4
神曽根		10		8
春日原	獅子村	8	13	2
大石脇		6		6
浜岳	津吉村	15	12	10
平床	中津良村	5	8	
大川原	紐差村	29	29	29

注：左の表は開墾助成法に基づく奨励金交付地区名、右の表は自作農創設特別措置法に基づく開拓農業組合の名称である。
：開墾助成法の記載は『開墾地移住ニ関スル調査（第 3 輯)』、自措法の記載は『平戸市史』『長崎県農地改革史』の記載に基づく。両者の記載・地名が異なる場合は、整合性から判断した。自措法の組合の一部を省略している。

平戸島中南部における信徒の居住と移住

江戸後期以降、平戸島中南部の多くの地区で新田の開発や山林開拓が進められ、平戸島内外の世帯が来住する。次に平戸島中南部への移住のうちカトリック信徒（キリシタン）の平戸島中南部の移住および居住状況と明治期における改宗の一端を明らかにする。

田崎集落

神鳥集落

表 5　紐差教会の信徒（教会役職等）と出身司祭等の居住状況

地区	信徒名	役職・役割あるいは居住の状況
紐差地区	萩原重三郎	妹が神鳥の藤沢家に婚出する。
	片岡	田崎出身
	塚本初治	母親が田崎出身
	塚本新太郎	母親が宝亀
	福田甚作	紐北部宿老
紐差一	糸永栄三郎	宿老・教え方
	大石惣市	宿老
	藤澤時雄	紐差一地区長
紐差二	大石伊勢之亟	教え方。父親は田崎の出身
	吉永直義	紐差二地区長
	萩原武雄	萩原兼太郎の子ども
	萩山九平	自分の家を旧御堂に開放して焼山に移住する。
	萩山家・鴛渕家	萩山家 6 人・鴛渕家 6 人は仏教から転宗した最後の家。
紐差三	萩原兼太郎	教え方。配偶者は田崎の山頭家
	岩﨑保司	紐差三地区長
	中島竹蔵上下	林倉作の弟が中島家に養子に入る。
	林倉作	紐南部宿老
紐差四	石本金之亟	宿老
	田崎正雄	司祭
迎紐差	糸永俊雄	迎紐差地区長
石原田	石本市之亟	
	石田弘	
田崎	平山与五郎	石原田地区長
	田崎新ェ門	田崎の信者の先祖は山頭新ェ門。出津・黒崎を経て平戸に渡る。
	大石家	大石伊勢之亟の父の出身地。
	片山家	片山家は、山頭新ェ門の妻（宝亀京崎出身）の親族。
	藤澤安ェ門	教え方
	松山正治	教え方
	山頭源太郎	司祭
	片山次雄	田崎地区長
神鳥	藤澤幸雄	神鳥地区長
深川	小川七三郎（宿老）・小川多蔵（父豊蔵は和歌山県小川出身。20 歳で成人洗礼）・松永倉作（宿老）・小川栄次郎（教え方）・田中栄（教え方）松永平吉（修道士）・小川松次郎（修道士）・小川豊之亟（修道士）小川要蔵（神学生）・薄本弘（神学生）・田中保（深川地区長）	
朶ノ原	吉田国太郎・吉田吉太郎（宿老）・橋本正栄（第神学生・吉田士夫（神学生）・市山敬一（朶ノ原地区長）	
木場	藤田岩ェ見（宿老）・藤田弥吉（宿老）・前田市作（教え方）前田市太郎（木場地区長）	
木ケ津	佐々木金蔵（宿老・教え方）・佐々木利吉（宿老）・山田平一（教え方）・崎辺サト（教え方）・山田イネ（教え方）・佐々木真末（司祭）・萩原浩（司祭）・永田徳一（司祭）佐々木正一（神学生）・小山一郎（木ケ津地区長）・松山弘信（木ケ津地区長）・松山弘（木ケ津地区長）	
大河原	山田平吉	

注：『紐差小教区 100 年の歩み』に記載された信徒と出身司祭等を示したものである。

①木場地区田崎・神鳥

田崎の代表的な世帯に対する聞き取り調査（『マタラ師を偲ぶ』）で、19 世紀以降の来住が確認されている。迫害を逃れ信仰の安住の地を求めて大村・長崎・外海方面から小集団で、先住者の少ない田崎・神鳥地区に相前後して来住する（7 頁）[1]。10 数世帯に及ぶ移住信徒は山中に隠れ住み、一帯の山を開墾して畑にし、近くの海で漁業に従事する。これらの世帯のうち山頭新ェ門家が田崎地区の草分けとされる。「殆ど新ェ門の一族の田崎と言っても過言（で

ない＝筆者加筆)」(紐差小教区 100 年の歩み 12 頁)といわれ、世帯間の親族関係が推測される。

②紐差地区

旧紐差村の中心の紐差に紐差教会が所在する。しかしもともと居住の信徒世帯は少なく、多くは木場地区田崎・宝亀地区の信徒世帯の派生である(紐差小教区 100 年の歩み 28 頁)。表 5 は、『紐差小教区 100 年の歩み』に記載された紐差教会の信徒(古い信徒や教会役職等)と出身司祭等の居住状況である。この表から、紐差地区(1～4)の信徒(紐差の片岡・塚本初治・塚本新太郎、紐差二の大石伊勢之亟・萩原武雄、紐差三の萩原兼太郎と木場地区田崎・宝亀地区との親族関係(養子関係・通婚関係)が確認される。

紐差の各地区に関して、紐差二地区の場合、萩山家(6人)と鴛渕家(6人)は地下の仏教徒で、家族単位でカトリックに転宗した最後の家族である[(2)]。このうち萩山家は紐差一地区に居住していたものの、明治中期、旧教会堂として自宅を提供し、紐差二地区の焼山に転居する。紐差三地区の白床には、林家・中島家(林家から養子をとる)が移住する(紐差小教区 100 年の歩み 28-29 頁)。

③ 草積地区石原田

紐差地区に南接する草積地区には、生月島あたりから来住の潜伏キリシタンが居住していたといわれ、明治初期の外国人司祭は、平戸島(中部)でまず草積を訪問する。石原田では、表 5 の石本市之亟家等の信徒世帯がいち早く受洗する(紐差小教区 100 年の歩み 28 頁)。

④深川

紐差湾に面した迎紐差地区から谷筋を北上した山間の深川地区の田畑の面積は 40 町歩程度である。

深川地区

「上納米は割合に高く」(紐差小教区 100 年の歩み 28 頁)の記載から、明治期の信徒世帯は小作あるいは自小作とうかがえる。

この地区は、江戸後期以降に潜伏キリシタンや和歌山県(小川郷)出身の移住世帯(仏教徒)等の 35,6 世帯の混住であった。1971(明治 4)年、和歌山県出身の小川家が家族の病気回復を契機に改宗し、集落の約 10 世帯がカトリックに改宗する。なお、この改宗世帯に潜伏キリシタンが含まれたかどうかは不明である。その後、深川のカトリック信徒世帯・仏教徒世帯はともに 24 世帯に増加し、集落内の世帯数は拮抗する。こうした中で地区の仏教徒はカトリック信徒を「宗替え人」、自らを「正宗」と呼称し、信徒の聖体に対抗して小餅を飾り拝んでいたという。また互いを魚に例えて、仏教徒を「エタリ(カタクチイワシ)」、信徒を「真イワシ」と呼ぶこともあった(紐差小教区 100 年の歩み 27 頁)。

⑤木ケ津地区坊主畑

木ケ津地区坊主畑は地味がやせ、水利も悪い条件不利地のため、江戸期は広大な原野のままで人家は見られなかった。明治初年、この地に大村および黒島から信徒が開拓移住する。坊主畑の土地取得は、紐差村の信徒(林テル・末永市之助・大山庄作)の購入地を移住世帯に分譲するという形式である(紐差村郷土誌 81 頁)。なお『紐差小教区 100 年の歩み』では、坊主畑への移住は五島・黒島出身の世帯とされる(36 頁)。

1887(明治 20)年、さらに出津教会主任司祭のド・ロ神父が木ケ津地区赤松崎に 1 町 2 反 3 畝の土地を購入し、高野猿松・坂本卯左衛門・尾下力蔵・島田豊作の 4 家族 23 人を移住させる(片岡弥吉 203 頁)。『外海町史』によれば、明治中期にド・ロ神父が購入した赤松崎等の山林原野は 7 町余に及び、18 世帯 97 人の規模の移住である(596 頁)。この『外海町史』の土地の面積および世帯数には片岡の記した 1 町 2 反 3 畝の土地と 4 世帯 23 人が含まれると思われる。紐差教会での聞き取りによれば、坊主畑の下側が紐差村の信徒の購入地、上側がド・ロ神父の購入地と推測される。

なお、『紐差村郷土誌』に記された明治初期の移住世帯の出身地の大村は、おそらく旧大村藩領の長崎市外海地区と思われる。これらの記述を整理すれば、移住世帯の主な出身地は明治初期が五島・黒島、

大佐志集落

明治中期が外海地区（出津等）と見られる。

⑥旧津吉村古田地区大佐志

平戸島南部の西海岸に位置する古田地区は、平地が多く水利に恵まれていたものの、土地がやせ世帯が少なかったという（津吉村郷土誌）[3]。この古田地区西側の山深い半島の北側の斜面・海岸に位置する大佐志に、時期不詳であるものの五島・黒島から信徒が来住する（紐差小教区 100 年の歩み 33 頁・津吉地区郷土史 39 頁）。一方、板橋勉によれば、「明治初年浦上より移住したもので、初め紐差の木ケ津へ来たが余地がないため新たにこの地を開拓したのであつて、現在の戸数は約 40 戸、粗衣粗食に甘んじ信仰がひじょうに厚い」（板橋勉 214 頁）集落である。さらに島原の乱後に島原から移住したという説もあるという（津吉地区郷土史 39 頁）。紐差教会での聞き取りによれば、長崎の浦上四番崩れの流罪（旅）後に長崎市浦上地区に戻った世帯の中から、平戸島に土地を求めて古田新田周辺に移住した世帯があったという。

これらの記述や聞き取りを整理すれば、古田地区の信徒の来住は、まず江戸末期から明治初期に半島北の大佐志に五島・黒島から信徒世帯が来住し、少し遅れて大佐志や古田新田（明治初期に完成）・鮎川新田・佐志新田に浦上地区から連鎖的移住が生じたと推測できよう。

⑦宝亀地区雨蘇（今村）・京崎

宝亀地区の雨蘇（今村）は宝亀海岸から西方の山間地、京崎は宝亀海岸の丘陵地である。この宝亀地区には、土着のキリシタン世帯、仏教徒からの改宗世帯および移住世帯の三層の信徒世帯が存在する（宝亀小教区 100 年の歩み 74 頁）。

表 6　平戸島中南部の信徒状況

年	1880 年	1881 年	1883 年	1885 年	1886 年	1887 年	1888 年	1890 年	1893 年	1895 年	1896 年	1897 年	1899 年
	明治 13 年	明治 14 年	明治 16 年	明治 18 年	明治 19 年	明治 20 年	明治 21 年	明治 23 年	明治 26 年	明治 28 年	明治 29 年	明治 30 年	明治 32 年
地理的範域	平戸小教区の信徒数	平戸小教区の成人受洗者数		平戸島中南部の信徒	18 地区	平戸小教区の信徒数 17 地区					紐差教会の初聖体数	新平戸地区の信徒数 黒島・佐世保を除く	
信徒数	201 家族	94 人	134 人	1300 人	4200 人	4900 人	4510	5000 人	5400 人	5860 人	140 人	3846 人	4147 人
備考	平戸島の信徒世帯数			500 人以上が未回宗	平戸・生月・馬渡島・大島等				1 万人以上の未回宗者	増加の主因は、移住世帯と子供世代。		黒島・佐世保含む信徒数 6200 人	

注：『パリ外国宣教会年次報告Ⅰ・Ⅱ』（1996 年・1997 年）の記載から抽出したものである。

宝亀地区への移住世帯の出身地は、長崎外海地区（黒崎・出津）や五島が多いものの（板橋 212 頁）、長崎浦上からの来住世帯もある。来住時期に関しては、19 世紀の初頭から中頃とされる（宝亀小教区 100 年の歩み 74・94 頁）。その一方で、京崎・雨蘇に多くの移住が生じたのは明治初期とされる（平戸中南部史稿 195 頁）。

京崎地区に関する「私たちの先祖」という手記（宝亀小教区 100 年の歩み 85-86 頁）によって、1848 年頃に外海地区からの移住、京崎鼻から現在の宝亀教会下までの平戸藩の広漠な馬の牧場の存在が判明する。江戸末期・明治初期の京崎は、牧場跡の開拓地であったと見られる。

また 1950 年代の宝亀教会主任司祭の田原一男神父の調査や明治初期の洗礼台帳から、外海地区出津の要五郎・ミオ・ツナが平松家等、外海地区樫山の亨太が川渕家の祖先として辿れ、さらに五島や黒島からの移住者も確認される（宝亀小教区 100 年の歩み 75 頁）。

⑧獅子地区主師（山野）

平戸島北西海岸の山間地に位置する山野は、1820（文政 3）年頃、長崎市外海地区から上五島仲知に移住した世帯の次の移住地の一つとされる。岩石の林立する平戸島の北西部の小主師海岸に上陸し、山間に入って無人の原野を開拓して田畑を広げたという。移住当時の世帯数は 8 ～ 10 世帯で、全世帯が地名を姓とする（宝亀小教区 100 年の歩み 135-136 頁）。

表 7　平戸島・生月島の信徒数

1928 年			1937 年			1968 年			1975 年			世帯数
紐差（田崎・古田）	信徒数	2075	紐差（古田・木ケ津）	信徒数	2140	紐差	信徒数	2386	紐差	信徒数	2007	335
	転入	－		転入	2		転入	10		転入	17	
	転出	－		転出	2		転出	227		転出	19	
	成人洗礼	5		成人洗礼	1		成人洗礼	4		成人洗礼	0	
	幼児洗礼	82		幼児洗礼	81		幼児洗礼	53		幼児洗礼	36	
宝亀（山野）	信徒数	944	宝亀（山野・中野）	信徒数	985	宝亀	信徒数	686	宝亀	信徒数	569	104
	転入	－		転入	21		転入	0		転入	8	
	転出	－		転出	1		転出	0		転出	15	
	成人洗礼	0		成人洗礼	0		成人洗礼	0		成人洗礼	0	
	幼児洗礼	43		幼児洗礼	28		幼児洗礼	18		幼児洗礼	10	
上神崎（平戸・古江）	信徒数	2357	平戸・生月（上神崎・古江・一部）	信徒数	2171	平戸	信徒数	1946	平戸	信徒数	884	178
	転入	－		転入	76		転入	0		転入	11	
	転出	－		転出	4		転出	94		転出	6	
	成人洗礼	0		成人洗礼	4		成人洗礼	4		成人洗礼	3	
	幼児洗礼	105		幼児洗礼	0		幼児洗礼	41		幼児洗礼	16	
生月（山田）	信徒数	349				生月	信徒数	433	生月	信徒数	324	64
	転入	－					転入	0		転入	0	
	転出	－					転出	0		転出	5	
	成人洗礼	1					成人洗礼	0		成人洗礼	1	
	幼児洗礼	12					幼児洗礼	12		幼児洗礼	10	
									上神崎	信徒数	771	162
										転入	4	
										転出	16	
										成人洗礼	2	
										幼児洗礼	6	
合計	信徒数	5725	5296			5451			4555			843
	転入	－	99			10			40			
	転出	－	7			321			61			
	成人洗礼	6	5			8			6			
	幼児洗礼	242	109			124			78			

注：カトリック長崎大司教区『旅する教会―長崎邦人司教区創設50年史―』（1977年）をもとに作成した。

⑨中野地区山中

旧中野村の山間地に位置する山中は土着のキリシタン世帯の集落で、移住信徒が形成した集落ではない。しかし山中集落の潜伏キリシタンのうち明治期に信仰を復活させたのは7世帯にすぎず、多くの世帯は仏教にとどまる。そのため明治期に集落内でたびたび対立が生じ、中には裁判に発展する事件も生じる（宝亀小教区100年の歩み155-156頁）。

平戸島中南部における信徒の居住の展開

江戸後期・明治期に平戸島中南部に移住した信徒（キリシタン）世帯では、明治期に多く住民がカトリックに回宗するとともに平戸島中南部への定住が進む。

①平戸島中南部の信徒の状況

表6は明治・大正期に日本を管轄していたパリ外国宣教会年次報告に記載された黒島・佐世保地区を含む平戸小教区に関する信徒状況、表7は邦人司教区後の平戸島・生月島の信徒状況である。表6の明治10年代の多数の成人洗礼者数から、明治初期の信徒増加が潜伏キリシタンの回宗であることが分かる。

しかし、明治中期以降になると非回宗者の受洗に関する記述が減少し、信徒数の増加は信徒の自然増（子供世代の誕生）と推測できる。平戸島・生月島・黒島・神崎・褥崎・大島・馬渡島等を含む平戸小教区の信徒数は、明治20年代に4～5000人に増加し、1897（明治30）年には6200人に達する。紐差小教区の紐差（平戸）・黒島・佐世保の3小教区への分離後、平戸地区の信徒数は3～4000人に増加する。表示していないものの、昭和期には平戸地区（田平小教区を含む）の信徒数は1928年8243人に達し、明治中期から昭和初期に平戸島の信徒がさらに増加する。

平戸地区のうち平戸島中南部の信徒数は、明治中期（明治18年）に1300人である。この信徒数は、明治10年代の紐差小教区全体の信徒数（153人）と比較しても10倍近い信徒数である。さらに表7で昭和期の信徒数を見れば、1928年の紐差小教区（田崎教会・古田教会を含む）2074人・宝亀小教区（山野教会を含む）944人の合計3019人、1937年の紐差小教区（古田教会・木ケ津教会を含む）2140人・宝亀小教区（山野教会・中野教会を含む）985人の合計3125人に達する。すなわち明治中期から昭和初期の間の平戸島中南部の信徒数は2.5倍に増加し、平戸島全体と同様に高い増加状況にある。

表8　カトリック信徒の居住・生活の展開

旧村・地区	集落等	移住時期（居住状況）	出身地	その後の状況
木場地区	田崎	19世紀以降	近隣（神鳥）長崎・外海	半農半漁。片山家は宝亀京崎から居住展開する。紐差地区に居住展開する。
	神鳥		－	藤沢家が居住展開する。
紐差地区		不明	多くは近隣（田崎・宝亀）	信徒世帯数が増加し、大正末期には入りきれなくなる。
草積地区	石原田	不明	生月島等	－
深川地区		不明	潜伏キリシタンに加えて、和歌山県出身者（仏教徒）	明治初期35,6世帯。改宗当時の10世帯はその後24世帯に増加（仏教世帯も同世帯数）。迎紐差に居住展開が見られる。またブラジルに3世帯が移住する。
木ケ津地区	坊主畑	明治初期	外海・黒島	50世帯に増加。第二次世界大戦前は漁業を主として、度島・大島の船で漁労。厳しい生活状況にあった。
		明治中期	外海（出津）	
古田地区	大佐志	江戸末期・明治初期	五島・黒島	半農半漁であったが、その後養豚に営農転換する。大正期に17世帯、1960年代に62世帯に増加する。
	古田新田周辺	明治初期	浦上（木場）	
宝亀地区	京崎	19世紀初頭から中期（多くは明治初期）	外海・黒島五島	明治中期に信徒世帯数は18世帯。
	今村（雨蘇）			明治中期に信徒世帯数は12世帯。
獅子地区	主師（山野）	19世紀前半	上五島（仲知）	明治中期に17世帯、昭和期に28世帯に増加する。
中野地区	山中	－	土着	現在まで農業に従事し、明治初期の7世帯の信徒世帯数が10数世帯に増加、昭和初期に23世帯となる。

注：『紐差小教区100年の歩み』『宝亀小教区100年の歩み』『紐差村郷土誌』等の記載をもとに作成した。

パリ外国宣教会年次報告は、こうした信徒の増加要因を五島・外海からの移住と子供世代の洗礼数の増加と指摘する（パリ外国宣教会年次報告 266 頁）。この報告書が指摘する２要因を平戸島中南部に関連づければ、木ケ津地区坊主畑に見られるように明治中期にも島外から移住が継続したこと、（回宗・改宗信徒を含む）定住信徒の子ども世代が増加したことが当てはまる。

このうち移住は、表 7 の 1937 年の転入信徒数がやや多い宝亀でも 21 人、世帯換算で 4,5 世帯程度の移住にとどまり、明治後期以後の来住は限定的である。一方、子供世代の急増は、明治中期の紐差教会の初聖体（洗礼の 6,7 年後の秘跡）数が 140 人に及ぶこと、さらに小教区分割後の紐差小教区・宝亀小教区の幼児洗礼数が 1928 年 123 人、1937 年 81 人に達している[(4)]。そのため平戸島中南部の信徒数の増加の大半は、やはり自然増といえよう。

さらに、子供世代の急増は、出生の 2,30 年後の分家の創出につながる。各地区・集落別の信徒世帯数の状況は不明であるものの、表 8 の平戸島中南部の信徒の居住・生活の展開から、若干ではあるが地区・集落の世帯の増加状況がうかがえる。すなわち、紐差教会設立の 30 ～ 40 年後の大正期には、教会に入りきれないほどに信徒世帯が増加する（紐差小教区 100 年の歩み 24 頁）[(5)]。木ケ津地区坊主畑では、明治初期に移住した数世帯に明治中期に 18 世帯が加わり、昭和 30 年代に 73 世帯に達し、約半世紀で世帯数が 3 倍に増加する（山頭亀一 15 頁）。古田地区では、江戸末期・明治初期の移住世帯が大正期に 17 世帯に増加する。宝亀地区の京崎・雨蘇（今村）は、明治中期に信徒世帯数が 18 世帯・12 世帯に増加する。獅子地区主師（山野）では、移住時の 8 ～ 10 世帯が明治中期に 17 世帯、中野地区山中では、明治初期の 7 世帯が 10 数世帯に増加する。なお山野の世帯の増加状況に関連して、「1890（明 23）青年会発足し、開拓に尽力した」（宝亀小教区 100 年の歩み 140 頁）という記載もある。こうした各地区・集落の世帯の増加は、明治中期以降の平戸島中南部の各地区・集落への集団的な来住世帯の記録が見られないことからも、江戸・明治期の移住世帯の分家創出と見て間違いないだろう。

なお、昭和 40 年代に宝亀教会・紐差教会の主任司祭であった田原一男神父の主導で宝亀地区・中野・坊主畑に簡易水道が開設され、地区・集落の生活基盤の整備が進む（山頭 29 頁）。

表 9　紐差・宝亀小教区の地区別の信徒世帯数・人数

紐差小教区

地区		紐差				深川	木場	田崎	神鳥	迎紐差	朶ノ原	木ケ津		大佐志	獅子	合計
		一区	二区	三区	四区							一区	二区			
1980年代	世帯数	45	42	21	23	26	25	36	11	5	14	8	48	50	6	360
	人数	156	238	80	114	172	124	148	58	24	113	35	194	203	24	1683
2014年世帯数		33	48	15	28	27	23	25	9	2 ～ 3	13	5	28	28	4	288 ～ 9

宝亀小教区（1980 年代）

地区	今村	京崎	山野	中野	合計
世帯数	35	36	28	17	116
人数	139	142	150	65	496

注：『紐差小教区 100 年の歩み』『宝亀小教区 100 年の歩み』の信徒数・世帯数を集計したものである。
：現在の紐差小教区の地区割りは、木ケ津が 1 つ、獅子が大石脇に代わり、石原田が復活している。
：2014 年の世帯数は、紐差小教区の集計による。

表 9 は、1980 年代前半および一部 2014 年の各地区・集落の信徒世帯数である。木ケ津 56 世帯・古田（大佐志）50 世帯・京崎 36 世帯・今村 35 世帯・主師（山野）28 世帯・中野 17 世帯で、明治中期か

らさらに世帯数が増加している。木場地区（田崎・神鳥・木場）は移住時の10数世帯が62世帯に増加し、深川もわずかに世帯数が増加する。紐差地区の中心の紐差は、明治初期には信徒世帯が少なかったものの131世帯に及ぶ。

②平戸島中南部における居住の展開―集落内外の分家の創出―

平戸島中南部の信徒世帯の地区・集落内の分家は、紐差教会での聞き取りによれば、本家世帯の周辺に創出されることが多い。その背景の一つには、集落単位の墓地（集落墓地）の存在が大きいという。集落内の分家創出の傾向は、第二次世界大戦後の農地改革の自作農創設によってさらに広まったという。なお紐差地区では農地の相続は兄弟の均分も多いため、こうした分家世帯の創出は常に本分家を含めた農地の縮小を生じる可能性があろう。

一方、早期から中心地区の紐差に周辺地区の分家が創出され、現在では信徒世帯の居住は半数強に及ぶ。紐差教会での聞き取りによれば、紐差地区にはかつて大地主が2家あり、その小作も多かったという。

3　平戸島中南部以外への信徒の移動

平戸島中南部に定住した信徒世帯は、明治以降、増大をつづける。しかしその増加状況は当時の一般な人口動向を上回る一方で、表6・表7の幼児洗礼数・初聖体数から推定される出生数に及ばない。各地区・集落の世帯の増加が一定程度にとどまるのは、信徒の厳しい生活状況が制限要因になったためと推測できる。

すなわち、大正期の紐差村のカトリック信徒の生活は、「当村は面積に比し原野山〇多きため耕地少なく且つ耶蘇教特有の開墾をなし殆んど余す所なく耕せられたるを以て将来嘱望なし而して一面には此教徒すでに稠密なるため陸上収穫のみを以て生計を維持困難により長幼となり海上に向つて活路を拡めつゝあるも猶生活困難の為他地方へ移出者あるの状況」（紐差村郷土誌201頁）にあった[(6)]。実際、木ケ津地区坊主畑では、第二次世界大戦前は漁業を主とし、度島、大島等へ出稼ぎの者も多かつたという（板橋213頁）。

明治後半に平戸島中南部に島外からの来住世帯が途切れたことは、信徒の農業世帯がすでに飽和状態にあったことを推測させる。さらに小作地と分割相続で縮小した農地での営農では、漁労による収入補完にもかかわらず十分な収入を得にくい状況を生み出した。その結果、平戸島中南部内の開拓地への新規入植が発生したと推測される一方で、早くも明治中期に平戸島中南部の定住世帯から他出世帯が多数生じる。

平戸地区

平戸島北部への信徒の移住は、明治初期の黒島・五島の出身者の大久保半島の丘陵地（神崎の馬の牧場跡地）への入植が嚆矢である。さらに明治中期、既存の農地があり売買が容易であった平戸地区赤坂・杉山・大垣等に神崎経由および五島・外海地区から直接に移住が生じる。

中南部最初の移住者、宝亀地区の末永音二郎の来住もこの時期である。その後、中南部から信徒世帯の移住が増加し、1900年代には30世帯に達する（西の久保小史25頁）。平戸地区は平戸島の中心地区であるものの、中南部からの移住世帯は、島外か

表10　平戸島からの平戸市田平地区への移住

移住地区	移住時期	出身地	世帯数	備考	世帯名
外目・以善・万場・下寺	明治41年	上神崎	1	自費	田村宇之助
永久保・野田	明治37年	平戸	1	自費	池田　長八
	明治37年	宝亀	1	自費	佐々木多蔵
	大正元年	宝亀	1	自費	松山喜衛門
	大正11年	上神崎	1	自費	牧野　金七
荻田	明治36年	宝亀	1	自費	横山増太郎
	大正15年	宝亀	1	自費	木村　富市
	昭和元年	紐差	1	自費	谷山　仁七

注：浜口勇『瀬戸の十字架』（16-21頁）をもとに作成した。

表 11　平戸口小教区（農業地区）の平戸島出身世帯

受洗教会	家族名	家族員数	誕生年	結婚教会	結婚年	夫結婚年齢
紐差	原田家	4				不明
	浜崎家	8	1904			不明
	川村家	7				不明
	小山家	2	1941	紐差	1974	33
	小谷家	6	1885（受 1896）		1913	28
宝亀	川原家	3	1932			不明
	黒崎Ｓ家	4	1927		1953	26
	黒崎Ｉ家	4	1925	相浦	1948	23
中野	岩永家	3	1932	平戸口	1959	27
山野	山野家	4	1934		1961	27
上神崎	明石家	8	1921	西木場	1959	38
	赤波江家	8	1904		1939	35
	畑原家	2	1918	南田平	1943	25
	星野１家	4	1934		1962	28
	星野２家	4	1906			不明
	池田Ｉ家	5	1936	平戸口	1961	25
	池田Ｓ家	5	1903			不明
	川脇家	9	1903	南田平	1929	26
	馬込家	6	1928	南田平	1950	22
	松下家	8	1900	南田平	1920	20
	真浦 To 家	8	1901		1955	54
	真浦 Tu 家	5	1930	紐差	1956	26
	白浜家	5	1943	西木場	1972	29
	上田家	2	1932		1956	24
平戸	上村家	4	1924	佐世保	1956	32
	小出家	4	1933		1963	30
	瀬戸家	10	1909		1927	18
	山口家	7	1915		1959	44
	山見家	4	1937	平戸口	1964	27

注：平戸口小教区信徒台帳をもとに作成した。

ら来住の信徒世帯と同様に、農業を継続する世帯が多かったと推測される。

平戸島外の開拓地・農業地への移住

次に、平戸島外への移住の状況を見ていきたい。平戸島外の農業移住の資料が存在するのは、平戸島の対岸の平戸市田平地区・平戸口小教区（農業地区）と第二次世界大戦後の開拓移住地の佐世保市烏帽子岳である。

明治中期、田平地区の丘陵地に黒島教会主任司祭のラゲ神父と出津教会主任司祭のド・ロ神父の主導による開拓移住が行われ、横立・江里山・瀬戸山に黒島・外海地区の信徒世帯が移住する。平戸島の信徒の田平地区への移住は、表 10 のように、後発の明治後期から昭和初期で、黒島・外海出身の信徒の居住地の周辺の平戸口の海岸の丘陵地（永久保・野田）や田平地区に隣接する荻田である（叶堂 2015 年ｂ 8 頁）。こうした平戸島の出身世帯の多くは、大地主の下で小作に従事していたという（浜崎勇 28 頁）。

平戸口への平戸島の信徒世帯の移住は、表 11 のように大正・昭和期も継続する（叶堂 2015 年ｃ 101 頁）。平戸島の移住信徒 29 世帯のうち中南部出身の世帯は約 3 分の 1 の 10 世帯である。内訳は、紐差小教区 5 世帯・宝亀小教区 5 世帯（宝亀教会 3・中野教会 1・山野教会 1）で、中南部の各地区・集落から移住が見られる。

長崎県北部の工業都市の佐世保市にも開拓移住が生じる。第二次世界大戦後、佐世保市中心部の背後にそびえる烏帽子岳の中腹（340 m）が自作農創設特別措置法に基づく開拓地に指定され、1946 年 20 世帯、1948 年 6 世帯、1950 年 1 世帯、1952 年 2 世帯、1953 年に 2 世帯が入植し、昭和 20 年代に 31 世帯に達する（佐世保市史産業経済篇 345 頁）。

紐差小教区の信徒の入植は後発の 1954 年である。草分けは紐差教会の紐差 1 区の宿老・教え方であった糸永栄三郎家で、子ども世帯（敬一）と一家二世帯の移住である。この入植は紐差地区で連鎖的移動を生じ、平本虎太郎・山頭冨士夫・橋口菊四郎・萩原儀信・萩原宗一・藤村佐一・萩原保義・糸永信義といった親戚や信徒が後続し、9 家（10 世帯）の規模になる（俵町小教区 50 年誌 71 頁・叶堂 2016 年ａ 28-29 頁）。なお烏帽子岳に入植した世帯の中には、現在、鉄筋工場や型枠大工、商店を経営している人もいるという。

紐差教会での聞き取りでは、昭和初期に佐世保駅に近い半島部の天神地区にも信徒の移住が見られた

表 12　平戸口小教区（産炭地区）の平戸島出身世帯

受洗教会	家族名	家族員数	誕生年	結婚教会	結婚年	夫結婚年齢
紐差	橋口１家	2	1907		1930	23
	橋口２家	11	1910		1932	22
	林家	5	1929	潜竜	1953	24
	石田家	7	1899		1946	47
	川渕家	3	1927	下神崎	1949	22
	川村１家	6	1926	神崎	1950	24
	川村２家	5	1935			不明
	川村３家	3	1935			不明
	川原家	9	1905（受 1911）		1956	51
	釜田Ｉ家	7	1922		1948	26
	釜田Ｓ家	7	1921	紐差	1946	25
	西浦家	5	1929	潜竜	1959	30
	山口Ｉ家	5	1930	下神崎	1958	28
	山口Ｋ家	4	1930	褥崎	1953	23
	山中家	8	1916		1943	27
紐差（木場）	川渕家	2	1933	潜竜	1962	29
	片山家	6	1923			不明
宝亀	平松家	3	1918		1931	不明
	川原家	9	1907		1931	24
	横山Ｙ家	9	1884			不明
	横山Ｓ家	9	1923	大村	1966	43
	横山Ｉ家	5	1926			不明
	米倉Ｔ家	4	1935（受 1938）	潜竜	1963	28
	米倉Ｙ家	6	1896		1921	25
	米倉Ｅ家	4	1932	潜竜	1955	23
山野	山野Ｔ家	5	1923	下神崎	1952	29
	山野Ｓ家	7	1904	下神崎	1931	27
中野	岡家	5	1926		1950	24
	久保家	4	1912（受 1953）		1953	41
上神崎	明石家	4	1920			不明
	明松家	6	1897		1926	29
	畑原１家	3	1921	加勢	1958	37
	原田家	6	1925	高島	1951	26
	畑原２家	4	1910		1941	31
	池田Ｍ家	9	1908		1931	23
	池田Ｓ家	6	1919	潜竜	1952	33
	石橋家	2	1914			不明
	木村家	7	1926	下神崎	1949	23
	丸山家	10	1929	平戸	1955	26
	岡家	7	1915		1939	24
	尾下家	9	1905	南田平	1948	43
	山本Ｈ家	7	1922		1946	24
	山本Ｎ家	7	1926	下神崎	1948	22
	山下家	5	1925	南田平	1952	27
	横岩家	7	1933	下神崎	1953	20
平戸	畑原家	6	1915		1946	31
	木村家	6	1902		1921	19
	丸山家	8	1901		1948	47

注：平戸口小教区信徒台帳をもとに作成した。

という。天神地区は佐世保駅に近いものの、急峻な崖山で交通が遮断された農業地区であった。第二次世界大戦後には、秋田県の八郎潟や諫早市の干拓地への開拓移住もあったという。

平戸島外の産炭地への移住

さらに、職業転換をともなう平戸島中南部からの移住も多く生じる。炭鉱労働は高度経済成長期までの主要な就業先で、そのうち対岸の北松浦半島の平戸小教区（産炭地区）・佐世保市加勢地区の状況に関する資料が存在する。

平戸口小教区は北松地区の複数の炭鉱地区も管轄し、表 12 は、潜竜教会等の巡回教会や集会所に所属していた産炭地の信徒世帯である。平戸島出身の世帯は 48 世帯に及び、産炭地の信徒世帯の 2 割を占める最多の出身地である。中南部の出身世帯はその約 6 割の 29 世帯で、内訳は紐差教会 17 世帯・宝亀教会 8 世帯・山野教会 2 世帯・中野教会 2 世帯で、各地区・集落に広がる。また世帯主の半数が 20 代後半以降の婚姻であるため、離家離村で産炭地に移動後に世帯形成をした男性も多かったと推測される。

表 13 は、日鉄北松炭鉱等のあった佐世保市加勢地区に居住していた大加勢教会（褥崎教会の巡回教会）の信徒世帯である（叶堂 2015 年 d 30-31 頁）。77 世帯の信徒世帯の約 3 割の 22 世帯が平戸島の世帯で、外海地区に次ぐ世帯数である。中南部の信徒世帯はその 3 分の 2 の 15 世帯で、内訳は紐差小教区 9 世帯（紐差 4 世帯・田崎 1 世帯・神鳥 1 世帯・木ケ津 2 世帯・獅子 1 世帯）・宝亀小教区 6 世帯（今村 2 世帯・京崎 1 世帯・山野教会 3 世帯）で、中南部の大半の地区・集落に広がっている。

なお、紐差教会の聞き取りでは、北松地区の炭鉱のあった佐世保市皆瀬に移住した信徒世帯もあったという。

表 13　加勢地区の平戸島出身世帯と他出先

出身地	世帯数	世帯名	加勢からの他出先
紐差	4	鳥羽家・橋口Ｚ家・橋口Ｆ家・山頭家	神田鉱１・潜竜１
田崎	1	林家	
神鳥	1	片山家	御橋炭鉱１
木ケ津	2	久我家・山田家	相浦１
宝亀	2	川原家・米倉家	潜竜１
京崎	1	林家	
山野	3	山野家・山村家１・山村家２	神田鉱２
獅子	1	山浦家	
平戸	6		佐賀１・小値賀１・福岡１
古江	1		
平戸島合計	22		
全体数合計	77	外海地区（25）・佐世保市（9）・田平地区（7）・ 長崎市（外海地区外）（6）・五島（6）・宮崎県（2）	

注：『褥崎 128 年―褥崎小教区沿革史―』（1992 年）の 236-247 頁のデータをもとに作成。
：出身地が不明の世帯は除いて集計している。
：山野地区の山村１・山村２は「山野」の転記ミスと思われる。

4　平戸島中南部における宗教コミュニティの形成と展開

江戸後期・明治初期に平戸島中南部に定住した信徒世帯は、明治初期の禁教令の高札の取り下げ後、多くの地区・集落で宗教コミュニティの形成をめざす[7]。外国人司祭の主導や援助で大半の地区・集落の教会・仮教会が設立される。しかしその前段階の民家御堂等の設立は、多くが信徒の手によるものが多い。

また、小教区の形成に関して、紐差小教区が平戸島および北松地区を広域管轄していたものの、しだいに中南部に縮小し、さらに宝亀小教区が独立する。

明治中期までの民家御堂・仮教会の設立

表 14 は、平戸島中南部の各地区・集落で生じた宗教コミュニティの胎動である。江戸末期・明治初期に信仰復活の早かった地域の信徒による平戸島中南部への伝道があり、さらにマタラ神父等の外国人宣教師の紐差地区来訪で、宣教・洗礼が行なわれる[8]。1873（明治 6）年の禁教令の高札の取り下げ前に山中の岩永家に信徒が密かに集まっていたが、高札の取り下げ後、平戸島に教会１・聖堂 6、学校と孤児院が設立される（パリ外国宣教会報告１63 頁）。

平戸島中南部では、1878（明治 11）年までに山中で岩永家、京崎で川渕家が民家御堂になり、1880（明治 13）年に木場地区田崎で田崎教会・田崎愛苦会（女部屋）、石原田で仮御堂が設立される。浦川和三郎は、石原田の民家御堂を石本金之亟が私費で設置した仮教会と見ている（切支丹の復活後篇 811 頁）。これらの記録等から、『パリ外国宣教会報告１』の教会は田崎教会、聖堂は民家御堂、学校と孤児院は田崎愛苦会の学校部屋と子供部屋と推測できる。その後、1883（明治 16）年に山野に布教所設立の許可が下り、1884（明治 17）年までに雨蘇の黒崎宅が民家御堂、1885（明治 18）年に京崎の川渕宅が仮教会、1890（明治 23）年に古田の小浜家が教会事務所になる。

平戸島中南部の展開を整理すれば、明治 20 年代前半までに紐差地区（この時期は木場地区田崎・草積地区石原田）・宝亀地区（雨蘇・京崎）・山中地区

石原田御堂跡

表 14　平戸市中南部の各地区・集落における宗教コミュニティの胎動

	パリ外国宣教会報告	紐差小教区 100 年の歩み		マタラ師を偲ぶ	宝亀小教区 100 年の歩み	
		紐差教会	大佐志教会		宝亀教会	山野教会・中野教会
1866年～1868年		**ラゲ**（紐差教会歴代主（助）任司祭の表）			**マタラ師**が紐差で宣教。	
1868年～1921年		**マタラ**（紐差教会歴代主（助）任司祭の表）			**ジラル師**、紐差に滞在。	**山中**　岩永家を集会所として密かに集まる。
1878年明治11年	一人の宣教師が担当。今迄普通の民家が彼らの祈りの会合の場所であった。こうしてこの２つの地区には……聖堂がいくつかある。				**ペルー師**京崎で洗礼を授ける。**京崎**の川渕寅ェ門宅をが民家御堂となる。	
1880年明治13年	平戸島に教会が１つ、6つの聖堂、学校と孤児院が存在する。	**ペルー師**着任。田崎に愛苦会を開設する。		**ペルー師**によって**石原田**に仮御堂、**田崎**に聖堂ができる。	**ラゲ師**が 1880 年以来 10 回訪問する。	
1881年明治14年						**ペルー師**、山野を巡回する。
1882年明治15年	**ペルー師**、司教に平戸・生月の状況を報告する。					**マタラ師**、山野を巡回する。
1883年明治16年	**ラゲ師**の受け持ちは平戸島で、大人の受洗者 134 人の三つの分教会の設立。				**マタラ師**が京崎・雨蘇を初めて訪問する。	山野和十郎宅に**山野**布教所設立認可。**ラゲ師**、**山中**を巡回する。
1884年明治17年					**雨蘇**ですでに黒崎元造宅を民家御堂とする。	
1885年明治18年	**ラゲ師**の報告。美しく大きな教会の建設が決議された。一人の信者が土地を提供する。	**ラゲ師**が着任し、教会と司祭館を田崎から紐差に移す。			**京崎**　川渕家横に仮教会を設立する。	
1886年明治19年	平戸地区に 18 の共同体と 9 の教会又は聖堂。二人の宣教師には資力がない。			旧紐差教会がこの年までに完成する。		
1887年明治20年		**マタラ師**が着任、聖堂が完成する。		ラゲ師が福岡に異動、**マタラ師**が着任する。	**雨蘇**で黒崎家横に仮教会を設立する。	**山野**　山野和十郎宅横に山野教会設立
1889年明治22年						**山中**　岩永家で秘跡が授けられる。
1890年明治23年			古田小浜宅を教会事務所とする。			
1896年明治29年	**マトラ師**、聖堂建設の費用の大部分を負担しなければならない。					
1898年明治31年	**クーザン司教**、宝亀教会を祝別する。				（**年表**）宝亀教会完成する。**マタラ師**、主任司祭になる。	
1899年明治32年					（**年表**）紐差教区から宝亀小教区が独立する。	**山野・中野教会**、宝亀小教区に所属する。山中では大石家が民家御堂で、祭壇は雨蘇の仮教会のもの。
1902年明治35年					（**年表**）**ボア師**、主任司祭となる。	
1911年明治44年			古田教会設立			
1919年大正8年					**ボア師**、主任司祭に再任する。	
1920年大正9年						**ボア神父**山野教会設立を決定する。
1921年大正10年		**ボア**（紐差教会歴代主（助）任司祭の表）				
1928年昭和3年						**山中**　松永銀弥宅を改造した中野布教所が開設する。
1929年昭和4年		紐差教会完成する。				

注：『紐差小教区 100 年の歩み』（1982 年）・『宝亀小教区 100 年の歩み』（1985 年）・『マタラ師を偲ぶ』（2016 年）・『パリ外国宣教会年次報告 1・2』（1996 年・1997 年）等の記載をもとに作成した。

田崎愛苦会跡地（旧田崎教会付近）

（中野）・主師地区（山野）・古田（大佐志）の各地区に教会・民家御堂等が設立され、現在の教会・巡回教会を胎生する類縁（宗教）関係の制度化の端緒が現われる。

明治中期における小教区の形成と教会の設立

明治期における平戸島中南部の信仰の制度化の段階では、外国人司祭の指導・援助が関係する。そのため宗教コミュニティの形成に関して、地区・集落以外の社会資源への着目が不可欠である。なお明治中期には、平戸島中南部に紐差と宝亀の2つの小教区が誕生する。

①紐差小教区の形成—紐差教会・古田（大佐志）教会の設立

（紐差教会）

明治初期の紐差地区では、信徒世帯の多かった木場地区田崎・草積地区石原田の2集落に、いち早く御堂・教会が設立される。『マタラ師を偲ぶ』には、大石伊勢之亟氏親書に依拠して「ペルー師によって石原田に仮御堂が出来、次に田崎に御堂が出来た」とある（7頁）[9]。このうち田崎の御堂（教会）は、田崎の南西部の谷道の上に平戸・北松地区の拠点として設立される（紐差小教区100年の歩み28頁）。この田崎の御堂の設立は、ペルー神父着任の1880（明治13）年と見られる。

同年、ペルー神父は、宣教司牧の協力者の女性組織（田崎愛苦会）を設立する。成員は10人で、田崎の山頭家の一室を間借りして共同生活を開始する。田崎の教会と司祭館は、その後、紐差に移転するものの、田崎愛苦会は田崎にとどまる（紐差小教区100年の歩み17頁）。一方、移転した田崎教会の建物は、田崎の稽古部屋（公教要理のための施設）に用いられる（マタラ師を偲ぶ7頁）。

紐差地区紐差における教会（紐差教会）と司祭館の設立は、『紐差小教区100年の歩み』では、1885（明治18）年、ペルー神父の後任のラゲ神父の着任の年とされる。その一方で、1887年（明治20年）にラゲ神父の後任のマタラ神父が出身国のフランスに寄付を募り、信徒の支援と動労奉仕で洋風の木造平屋の聖堂が完成したとされる（24頁）。

この間の事情に関して、『マタラ師を偲ぶ』に所収の「萩原與一氏の手記」には「ラゲ神父様はペルー神父様が建てられた愛苦会と子部屋とを田崎に残しおいて紐差に仮聖堂を建てられ、聖堂の側に有る古墳のところに司祭館を建てられました。（中略）聖堂は仮聖堂で後日立派なのを建てる予定でしたので、マタラ神父様は着任後間もなく工事に着手されたのです」とある（8頁）。

一方、『パリ外国宣教会報告1』の1885年と1886年の報告に紐差教会設立に関連する事項がある。まず1885年のラゲ神父の報告は「平戸では、……キリスト教徒にも離れ切支丹にもいちばん近づきやすい場所に、美しい大きな教会を建てることが決議された。そのために、島の中心地、紐差が選ばれ、一信者が自分の家の敷地を提供したが、それは付近全体で最も美しい場所である」（113頁）である。また1886年のクーザン司教の報告は「平戸島の真ん中、紐差に建っている美しい教会は特に記憶に残っている。私は今でも、二人の宣教師が資力もなく、その貧しさも、極貧に近い少数の信者たちのところでこのような大建築を企て、完成させることができた事

旧紐差教会（現馬渡島教会）

に驚嘆している」（116 頁）である。

これらの記録を整理したい。『紐差小教区 100 年の歩み』と「萩原與一氏の手記」から、わずか 2 年間の間に紐差に仮聖堂・聖堂が設立されたこと、『パリ外国宣教会報告１』から、前任・後任の外国人司祭 2 人の共同指導と支援で聖堂が設立されたことが確認できる。

さらに、先の大石伊勢之亟の親書から「現在の紐差教会以前、古御堂の敷地は萩山九平氏の父勇次郎さんは（「は」は「が」か＝筆者）自分の居宅を教会の為に開放して自分は焼山に移住したのです」（28 頁）という状況、萩原與一氏の手記から「この丘の上には萩山国作（九平さんの父）と萩山善之亟、今の坂尾さんの祖父と萩原兼太郎との三家族が住んでいましたが、神父様のお望みに従って異議なく萩山国作はコウロジ山、現在、萩山八郎さんの所に、萩山善之亟は今の坂尾さんの所に移転し、萩原兼太郎は山と畑を開放して聖堂の敷地としたのです」（8 頁）という状況が判明する。つまり両萩山家の家屋を開放（改築）して仮聖堂・仮司祭館とし、萩原家の敷地で聖堂・司祭館の建設を始めたと推測できよう[10]。なお司祭館の建設費用 750 円はマタラ神父の負担という（紐差小教区 100 年の歩み 28 頁）。

（古田教会）

津吉地区古田（大佐志）では、1886（明治 19）年頃から信徒がマタラ神父の指導を受ける。1890（明治 23）年に小浜家を教会事務所として、ミサや公教要理の勉強の場に用い、その後、信徒世帯が 17 世帯に増加したため教会の設立を決定する。マタラ神父の指導の下に、大佐志地区に約 130㎡の土地を買い、1912（明治 45/ 大正元）年に教会を設立する（紐差小教区 100 年の歩み 33 頁・信仰告白 125 周年 97-98 頁）。

②宝亀小教区の形成―宝亀教会・山野教会・中野教会の設立

（宝亀教会）

明治期、京崎・雨蘇（今村）に伝道師が入り、旧紐差村の他地区・集落同様にカトリックへの回宗が進む。さらに 1878（明治 11）年以降、ペルー神父・ラゲ神父・マタラ神父が宣教に訪れ、さらに回宗が進む。雨蘇では、1884（明治 17 年）に黒崎家が民家御堂になり、その 3 年後に黒崎家の横に仮教会が設立される。京崎では、1885 年に民家御堂の川渕家の横に仮教会が設立される。この仮教会は木造瓦葺で「当時の貧しい信者らにとっては大変な犠牲を捧げ、自分たちの家は藁葺であったが教会だけは瓦葺の立派な建物を建てた」という（宝亀小教区 100 年の歩み 76-79 頁）。

宝亀教会

宝亀地区における教会の設立は、2 つの仮教会を統合して小さくても教会と司祭館を設立したいという信徒の希望による。しかし、厳しい生活状況の中で準備を進めるものの、具体的な話し合いは進捗しない（長崎県世界遺産「構成資産等基礎調査」地域・地区調査報告書平戸地域Ⅲ-61 頁）[11]。教会建設用地が用意されたものの小学校が建設されたという『宝亀小教区 100 年の歩み』の記載が滞った状況を物語る。しかし「巡回指導されていたマタラ師が、自ら私財投資による教会建設の話を出」（82 頁）し、外国人司祭の主導と支援による教会の建設計画が進行する。

宝亀教会の用地は、大山家が雨蘇の小高い場所を提供する。建築資材は平戸島の対岸の北松浦半島田平地区から帆船で運ばれ、宝亀沖で小さなテンマ船に積み替えて宝亀浦の海岸に運び、信者たちが資材を背負ったりかついだりしながら 1 km 程の道のりを運搬したという。宝亀教会の建設作業には、紐差

教会の信徒たちも労働奉仕する。1898年に宝亀教会の献堂式が行われ、翌年、紐差小教区から宝亀小教区が独立する。その後、主任司祭のボア神父によって1905（明治38）年に司祭館、1910（明治43）年に伝道館が設立される（地域・地区調査報告書平戸地域Ⅲ-77頁）

なお、雨蘇の仮教会は廃教会後、宝亀浦にある法樹寺の近くに移築され、マリア堂と名付けられる。信徒の少ない地区であったが、漁港を利用する信徒が祈りを捧げたという。一方、京崎の仮教会は、京崎の村川家に移築される（宝亀小教区100年の歩み82-83頁・地域・地区調査報告書平戸地域Ⅲ-71頁）。

この宝亀教会の建設の事情をマトラ神父は、1896年に次のように報告する。「1895年に平戸で始めた建築の監督に時間を費やしている。それらの建築の一つは、紐差の新しいレジデンスである。他の一つは、宝亀とウソ……京崎の小さい共同体の宗教上の儀式のための聖堂である。関係のある人々は、心から寛大さと献身ぶりを示し、彼らに出来得る限りの仕事と金銭を提供したが、それにもかかわらず、私は費用の大部分を負担せねばならず、聖堂が完成することは希望しながらも、これまでに交わした契約の遂行のためにどのように対処すべきかがまだ分からない」（パリ外国宣教会報告2 105頁）というもので、外国人神父に教会設立を依拠していた状況が裏づけられる。

（山野教会）

獅子地区山野の民家御堂の設立の記録は見られない。しかし明治初期に長崎で洗礼等の秘跡を受け、1875（明治8）年に山野地区の宿老兼水方・教え方になった山野和十郎の自宅が、その後、山野布教所として設立認可される。このことから、1875年以後、和十郎宅が民家御堂であったと推測される。

1883（明治16）年の山野布教所認可は、「ラゲ師の尽力によるものと伝えられている」。1887（明治20）年、ラゲ師の尽力によって和十郎宅の隣接地に最初の山野教会が建設される（宝亀小教区100年の歩み136-137頁）[12]。

（中野教会）

中野村山中では、明治初期の伝道師の宣教の後に岩永家を集会所として、岩永家・本山家・竹山家・永田家・米倉3家が密かに集まる。集落内の宗教対立が激しい中、1883（明治16）年以降、外国人司祭の訪問がつづく。記録では、1889（明治22）年に岩永家で秘跡が授けられ、1899（明治32）年に大石家に雨蘇の仮教会の祭壇が移される（宝亀小教区100年の歩み155-157頁）。こうした記録から、山中では岩永家を民家御堂とし、その後、新たな信徒世帯の大石家が民家御堂となったと見ることができる（地域・地区調査報告書平戸地域Ⅲ-60頁）。この民家御堂は、仮教会の祭壇を設置している点で、集会所・仮聖堂（教会）の可能性もある。

大正期以降の小教区の展開と教会の建て替え・設立

明治期、主として外国人司祭の主導によって平戸島中南部の各地区・集落に設立された教会・仮教会等は、その後に信徒数の増加や老朽化のために建て替えや改築・増築が必要になる。こうした教会の建て替えや建築は、信徒組織を形成した各教会の信徒の主導に転換する。

①紐差小教区の展開と信徒組織

（紐差教会）

紐差教会の信徒世帯は、大正末期には日曜日のミサに早く行かないと聖堂に入ることができなくなるまでに増加する。すでにマタラ神父・ボア神父の時期から教会新築が検討され、資金積み立てや敷地の

紐差教会

整備が進められ、1927（昭和 2）年、最初の邦人司祭として着任した萩原神父の時に建設が決定される（紐差小教区 100 年の歩み 24 頁）。

建設見積額は 4 万円に及ぶ莫大な金額のため、10 人の宿老の中から特別建設委員を編成して、資金調達と労働供出の方法を検討する[13]。その結果、建設資金の確保は、村民税賦課等級に基づく各信徒世帯に対する供出（割り当て）制と寄附制の二本立てとし、労働供出は各世帯当たり平均 30 人役とする。

教会の建築は鉄川組が担当し、運搬船から陸揚げされた建築資材を人力で建築現場まで運搬し、起工式の 2 年後の 1929（昭和 4）年に 2 代目の紐差教会が完成する。さらに第二次世界大戦後の 1964 年に老朽化した司教館を新築する（紐差小教区 100 年の歩み 24-26・30 頁）。なお旧紐差教会は、2 代目の紐差教会を新築した時に解体され、佐賀県の馬渡島に移築されて馬渡教会として使用される（マタラ師を偲ぶ 8 頁）。

紐差教会の信仰教育は、日曜日のミサ後に各地区の公会堂や信徒宅で、各地区で選出され司祭が任命した教え方による父組・母組・男女別の青年会に区分された公教要理教育であった。教会下部組織としては、カトリック青年会・姉妹会・聖ヴィンセンシオ会・壮年会・レジオマリエ会が設立されていた。その後の信徒組織は、主任司祭指導の信徒評議会（顧問・会長・副会長・地区委員等）の下に各活動委員会（典礼委員会・要理員会・信徒使徒職委員会・広報委員会・使徒移動調査委員会・婦人会・青年会・高校生会・レジオ・マリエ会）が位置づけられている（紐差小教区 100 年の歩み 22・30・90-91 頁）。

深川地区から見る教会（中央部谷奥）

大佐志教会

（大佐志（古田）教会）

古田教会の設立後、信徒世帯は年々増加して増築の必要に迫られ、1952 年に 60 数㎡を増築し、さらに信徒世帯数が 62 世帯に達した 1966 年に再度増築する（紐差小教区 100 年の歩み 33 頁）。

1994 年には 2 代目の教会を新築し、大佐志から鮎川町に敷地を移転する（マタラ師を偲ぶ 15-16 頁）。巡回教会であるため、主教会の紐差教会での初聖体や堅信の秘跡は、自動車交通の発達前は紐差に前泊していたという。1975 年頃には、紐差教会の助任司祭が定住する（紐差小教区 100 年の歩み 34 頁）。

（木ケ津教会の設立）

木ケ津地区坊主畑はすべてが信徒世帯であったものの、移住後に教会が設立されないままであった。しかし、昭和初期にけいこ部屋を作り、仮聖堂として月に 1 回ミサを行なっている（山頭 8 頁）。戦後、紐差教会の助任司祭のグリーン神父から教会建設の提案があったものの、うまく運ばなかったという。その後、けいこ部屋が倒壊しかけたのを契機に「少しいい家ば作らにゃたい」という話が持ち上がり、さらに「病人や、もう紐差教会まで行けん年寄りたちの、月に一回でもよか、ごミサにあずかりたか、と言う願いも何とかしてあげたい」という思いが沸き起こる（紐差小教区 100 年の歩み 36 頁）。

木ケ津教会

こうした中で、平戸市の高校の古い体育館解体の資材を購入して新教会を建設する計画が立てられるものの、建設費用等の面で集落の集会は殺気立った雰囲気になる。発起人が佐世保市等の集落外の信徒世帯を回って寄付を募り、信徒の労働奉仕によって1962年に木ケ津教会が完成する。なお木ケ津地区の信徒のうち11世帯が紐差教会残留を希望したため、62世帯による設立である（山頭14-15頁）。その後、長崎教区から30万円の援助がある。また木ケ津僻地託児所を併設する（山頭30-35頁）。

教会設立後、紐差教会の司祭が月3回ミサに巡回し、ミサは信徒であふれるほどであったという。かつての坊主畑の「正直言って、その頃ここの人は、人並みでなかったと言うか、……。坊主畑のもんと言われるのが非常に好かんでした」という状況が、教会設立後には集落の住民が誇りをいだくようになり、さらに「自分たちの力で神父様ば養うても、養いきらんことはなかばい」と自信にあふれたという（紐差小教区100年の歩み36-38頁）。

②宝亀小教区の展開と信徒組織

（宝亀教会）

宝亀教会の設立後、昭和期（1930年・1952年）と平成期（1998年）に補修が行われるものの、建て替えはない。一方、司祭館は、1969年に2代目に建て替えられる。また1966年に宝亀小教区の4地区合同評議会が開催されて宝亀保育園の設立が決議され、翌年に開園する。保育園の敷地は信徒からの農地の寄贈で、建設費は教会所有の山林の杉の木の売却費を充てる。

宝亀教会の信徒組織は、1957年に宿老から使徒信徒職会に改変され、会長・副会長（山野地区・中野地区）・庶務会計が3役で、その後、教会顧問が置かれる。教会のアクション団体として、宝亀カトリック婦人会・聖ヴィンセンシオ会・カトリック子供会・宝亀カトリック青年会（その後、山野・中野の青年会と合併）・若葉の会等がある。また1975年以後、宝亀小教区運動会が開催される。

信徒教育は、かつては京崎・雨蘇の仮教会の日曜日のミサ後、教え方が信徒宅で公教要理を担当していた。宝亀教会設立後は、教会内の稽古部屋で学ぶ形が加わる（宝亀小教区100年の歩み90-91・97-102頁・地域・地区調査報告書平戸地域Ⅲ-76-77頁）。

（山野教会）

山野では、ボア神父が2度目の宝亀小教区主任司祭の大正期に新教会の建設準備を進める。赴任の翌年の1920（大正9）年に新教会の建設を決意し、信者と建設の話し合いを行なう。

新教会の敷地としてボア神父は信徒の所有する集落中央部の約3反の畑を希望し、その信徒は所有する最も大きく良質の農地を寄贈する。建築費用は、信徒の積み立てや寄付さらに神父の各方面からの寄付集め等で4年足らずで資金（8千円）のめどをたて、1924（大正13）年、前年に赴任したボネ神父の時に建築を始める。信徒の労働奉仕等で敷地の整地や海岸から1㎞の坂道の資材運搬によって、同年、新しい教会が設立される。旧教会は移築・改造されて司祭館兼伝道館となる。

しかし、交通不便のために司祭の巡回は月に1回（1,2泊）程度で、信徒は祝日のミサには10㎞の距離を徒歩で宝亀教会に通ったという。

信徒組織は、宿老と会計が2役である。1963年以降、使徒信徒職が創設されるものの、宿老は残存す

山野教会

中野教会

る。アクション団体は、婦人会・青年会（一時消滅後に再度結成）が存在し、信徒教育は教え方が担当する（宝亀小教区 100 年の歩み 136・138・140-143 頁）。

（中野教会）

中野地区山中では、1928（昭和 3）年、信徒世帯の増加のために集落の土地を購入し、民家を移築・改造して中野布教所が設立される。しかし、交通不便のために、司祭の巡回も信徒の宝亀教会・紐差教会のミサ参加もまれであった。

第二次世界大戦後には、さらに信徒世帯が増加して 23 世帯になる。宝亀教会のミサ参加が困難なために、中野への巡回を紐差教会の助任司祭のグリーン神父（コロンバン会）に依頼し、神父の訪問が始まる。この交流の中で、神父は信徒の教会設立の希望を聞き、中野教会の建設を主導する。なお中野の信徒に神父を紹介した宝亀教会主任司祭には、「グリーン神父様は、布教のために使うお金を持っておられ、木ケ津に教会を建てようかと思っておられるようだが、まだ決心していないから、中野に巡回してその様子を見られたら、教会を建ててくださるかもしれない」という期待があったという。

1952 年の教会設立後、布教所は司祭館と要理教室に使用する。その後、老朽化のために、1965 年、司祭館と要理教室を新築する。また 1961 年にお告げのマリア修道会紐差修道院の運営の中野愛児院が開設される。信徒の所有地を譲り受けて、中野小学校改築のための廃校舎を利用し、信徒による敷地の整理・建築資材の運搬等の協力で完成する。

中野教会の信徒組織は、1952 年に宿老が教会顧問に変更し、1958 年から使徒信徒職（信徒職会長）が創設される。教会のアクション団体として、婦人会が存在する。信徒教育は、昭和 20 年代までは教え方による要理教育であったと推測される（宝亀小教区 100 年の歩み 155-163 頁）。

（獅子教会）

1952 年に獅子地区に獅子教会が設立される。木造 116㎡の教会で建設費は 60 万円であった。信徒世帯 7 世帯に地区の未信者・地区外の信徒の奉仕で完成する（カトリック教報 1952 年 2 月）。しかし 1970 年代には廃堂になっているようである（長崎のカトリック教会 79-80 頁）。昭和 30 年代の世帯は 5 世帯（山頭 12 頁）、表 9 の紐差小教区の獅子地区の 1980 年代の信徒数は 6 世帯 24 人である。

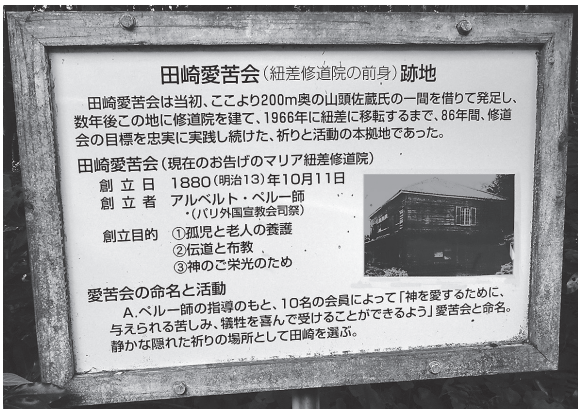
獅子教会跡（萩原隆夫氏提供）

お告げのマリア修道会紐差修道院（田崎愛苦会）

平戸島中南部の信徒の信仰と日常生活に大きく貢献したのが、女子修道院である。その形成と役割にふれたい。

明治初期、南緯代牧区の司教から外海・黒島・平戸・馬渡島の管轄を委託されたペルー神父は黒島と平戸に拠点を設立し、黒島と平戸島における司牧の手伝いと教会奉仕を担当する女子修道会の創設を計画する[14]。1880（明治 13）年、黒島では信徒の土地建物の提供で黒島愛苦会が創設され、平戸島でも旧紐差村に修道院の設立が計画され、田崎 4 人・紐差 1 人・木場 2 人・大佐志 1 人・生月 1 人・宝亀 1 人の 10 人が選ばれ、木場地区田崎の山頭家の一室を借りて共同生活が始まる（マタラ師を偲ぶ 4 頁・黒島修道院 100 年の歩み 22 頁）。

1882（明治 15）年、平戸地区・黒島地区は、主任司祭ラゲ神父・助任司祭マタラ神父の担当に代わる。この二人の神父によって、長崎司教を総裁とし孤児と老人の養護、伝道と布教等を活動目的とする愛苦会の会則が作成される。平戸地区を担当するラゲ神



田崎愛苦会

父は、この頃、山頭家の近くの山林を購入して、10人の会員に開拓させている。

創設5年後（1885年）には会員が増加し、両神父の援助で最初の修道院が建設される。修道院の立地に関して、ラゲ神父は将来を見越して紐差を主張し、マタラ神父は隠れた所が修道院にふさわしいと田崎を主張し、マタラ神父が主張する田崎に決定する。新設された修道院の中に孤児の養育室が設けられ、間借りの部屋では対応できなかった創立の目的（孤児や老人の養護）の一つが実現される。

この養護室は「子部屋」と呼ばれ、1892, 3（明治25, 26）年頃になって修道院から500 m程度の農地に独立した施設が建設され、責任者が常駐する施設になる。1887年に平戸地区の責任者になったマタラ神父はこの子部屋の経済的援助を続けながら、小教区の巡回時に「不幸な子供を拾ってきたり、身寄りのない老人を連れてき」たという[15]。

1899（明治32）年、マタラ神父の設計による新修道院の建築が田崎で始まり、西洋風の木造二階建ての施設が3年後に完成する。この工事に田崎・紐差・木場・宝亀・木ケ津の各集落の信徒が労働奉仕をする。さらにマタラ神父は、愛苦会の会員に東京や熊本で専門教育を受けさせて地域の社会的剥奪の解消をめざし、平戸島で唯一の和裁教室を修道院内に開設する。「学校部屋」と命名され、信徒・非信徒を問わず、木ケ津・草積・宝亀・水垂から通学する。マタラ神父は盲唖学校の設立を計画したものの、東京で専門教育を受けた担当予定の会員の病死のために施設の開設には至らなかった。

この頃の田崎愛苦会（田崎修道院）の会員は、農作業や機織り、行商で生計を立て、宣教・要理教育・養護等を担当する。このうち薬品や日用品の行商は、非回宗の世帯への宣教を兼ねたものである。会員数はさらに増加して35, 6人に及び、大正・昭和初期には北松の各地区（田平教会・馬渡島教会・上神崎教会・平戸教会・生月教会）の修道院の新設の指導や担当者の養成等が依頼される。

第二次世界大戦中（1943年）、夫の兵役のために農作業の負担が過重となった母親のために、紐差教会の地下室を借りて農繁期託児所東亜愛児園を開設する。この施設は第二次世界大戦後、児童福祉法の保育所（東和愛児園）として認可され、その3年後の1959年に紐差教会の下の土地を購入し、東和愛児園は独立の新園舎に移転する。1961年には、宝亀教会主任司祭の要請で中野地区山中に宗教法人中野愛児園を設立し、1967年に宝亀地区に社会福祉法人宝亀保育園を設立する。さらに1972年には、保育を必要とする児童増加に伴い東和愛児園が新築移転し、社会福祉法人東和愛児園になる。

第二次世界大戦後、田崎修道院は児童福祉分野に主力を注ぐ中で、戦前からの修道院の建物は老朽化のため居住が困難になる。周辺部に位置する田崎の立地も課題になって、修道院は紐差に移転をめざして紐差の信者の土地を購入し、1966年に185㎡2階建ての新修道院を建設する。なお、田崎に所有していた農地は、水田は移転後も数年稲作を継続する一方で、畑は小作に出したり、中野・紐差の保育園の設立費用や修道院の新築費用のために売却する（紐差修道院100年の歩み19-26頁）。なお、第二次世界大戦後の1956年には、女子修道院の組織統合によって聖婢姉妹会紐差修道院、1975年にお告げのマリア修道会紐差修道院に改称する。

5　平戸島への信徒の移動と宗教コミュニティの形成の社会的特徴

ここまで平戸島中南部における信徒の移住と定住、宗教コミュニティの形成を明らかにした。最後に、平戸島中南部への信徒の移住と定住および中南部外への他出、宗教コミュニティの形成の社会的特徴を検討する。またド・ロ神父の主導する開拓移住地の比較を通して、木ケ津地区への移住の特徴を明らかにする。

平戸島中南部における移住と定住の社会的特徴

第1の特徴は、平戸島中南部への移住が後発で、多くの移住地が条件不利地区という点である。紐差地区の多くは山地や半島の丘陵地、原野の条件不利地区である。江戸後期に新田開発や山地・丘陵地の開拓が進む中で、表15のように、潜伏キリシタンのうち平戸島内や生月島等の世帯が草積地区石原田・深川地区・中野地区山中に移住する。

一方、信仰復活の主体の島外の信徒の移住は江戸末期・明治期で、多くが山間地や半島の原野や牧場地の開拓・開墾である。いずれの入植も同郷世帯の集団的・連鎖的移動という特徴があるものの、その

表 15　カトリック信徒の居住・生活の展開

旧村・地区	集落等	信徒の移住前の地域状況					信徒の移住		出身地						その後の状況				
		地理的状況	土地利用	新田開発	開拓	先住世帯	時期	生産状況等	平戸島中南部	五島	黒島	外海	長崎浦上等	その他	世帯数増加	信徒世帯比率	他出（中南部）	他出（他地区）	その他
木場地区	田崎・神鳥	半島の山間部	原野			少数	江戸期以降	開墾と漁労	○			○	○		○	◎	○	○	漁労
	木場	山間地				存在									○	○		○	
紐差地区		広い平地が存在	農地	○		存在	不明	地主が所在	○						○	○		○	
草積地区	石原田		牧場		○		不明							生月島等		○			
深川地区		山間地		○		存在	不明	小作地存在						和歌山県	○	○	○	○	
迎紐差地区			農地	○												△			
朶の原地区		平地奥	原野	○		不在		小作地存在								○			
獅子地区																△			
木ケ津地区	坊主畑	山間のやせた土地	原野			不在	明治初期	購入地を開墾			○	○			○	◎		○	漁労
							明治中期	神父が購入				○							
古田地区	大佐志	やせた土地。大佐志は半島				不在	江戸末期明治初期	開拓		○	○				○	◎			営農転換
	鮎川周辺			○			明治初期	新田耕作					○			△			
宝亀地区	京崎	海岸の丘陵地	半島の牧場		○		江戸・明治初期	開拓		○	○	○			○	○		○	
	今村（雨蘇）			○		存在									○			○	
獅子地区	主師（山野）	海岸奥の山間	原野			不在	江戸期	原野の開拓		○					○	◎		○	
中野地区	山中	山間地					–	集落内で対立							○	△		○	

注：その後の状況の信徒世帯比率は、◎は大半、○は３分の１以上、△は３分の１未満を示す。

表 16　紐差地区の信徒比率

地区	紐差				深川	木場	田崎	神鳥	迎紐差	朶ノ原
	一区	二区	三区	四区						
信徒世帯数（2014 年）	33	48	15	28	27	23	25	9	2 ～ 3	13
集落世帯数（2010 年）	85	68	34	53	57	38	24	17	31	24
信徒比率（%）	38.8	70.6	44.1	52.8	47.4	60.5	104.2	52.9	6.5 ～ 9.7	54.2

注：集落世帯数は『2010 年世界農林業センサス集落カード』に基づく。そのため紐差小教区集計の世帯数と集計方法が相違するケースがある。また紐差小教区集計には移籍等の手続きをとらず他出した世帯が含まれるケースがある。

表 17　宗教コミュニティの形成と展開

小教区	教会	旧村・地区	集落等	移住時期	民家御堂・集会所		仮教会・仮聖堂						教会 1						教会 2					
					時期	信徒	時期	司祭		信徒			時期	司祭		信徒			時期	司祭		信徒		
								主導	資金	資金	土地	労働力		主導	資金	資金	土地	労働力		主導	資金	資金	土地	労働力
紐差小教区	紐差教会	木場地区	田崎	江戸期以降									1880年	○	○				1929 年	○		○	○	○
		紐差地区		不明			1885年	○			○		1886年	○	○		○	○				○	○	○
		草積地区	石原田	不明			1880年	外国人司祭と信徒の設立の 2 説														○	○	○
		獅子地区						不明					1951年			○	○	○				○	○	○
	木ケ津教会	木ケ津地区	坊主畑	明治初期・中期				要理教室でミサ					1962年		△	○	○	○				○	○	○
	大佐志教会	古田地区	大佐志	江戸末期・明治初期	1890 年	○							1912年	○					1994 年			○	○	
宝亀小教区	宝亀教会	宝亀地区	京崎	江戸期明治初期	1878 年以前	○	1885年			○			1898年	○	○		○	○	昭和期（1930 年・1952 年）と平成期に補修。					
			今村（雨蘇）		1884 年	○	1887年			○														
	山野教会	獅子地区	主師（山野）	江戸期	1875 年以降	○							1887年	○	○		○		1924 年	○	○	○	○	○
	中野教会	中野地区	山中	–	1878 年以前	○	1928年			○			1952年	○	○									

注：木ケ津教会の教会 1 の△は、教会の建設後に長崎教区から一部援助があったことを示す。

規模や立地の点で状況に差が生じる。すなわち規模に関しては、とりわけ大規模な牧場跡地の京崎は3地区の出身世帯が混住する。立地に関しては、最も山間地の山野は五島の出身世帯のみである。さらに非信徒との関係では、海岸や平地の地区・集落の信徒の比率に比べて、半島（田崎神鳥・大佐志）や山間地（坊主畑・主師）で信徒の比率が高い。

こうした移住地の社会的特徴は、移住の後発性とともに信徒世帯の経済的事情に由来すると推測される。すなわち信徒の移住地の山間や丘陵の原野は開墾の必要があるものの、安価で購入できるか開墾時の地代の免除によって世帯の負担が軽減されるからである。中南部の中で京崎の牧場地はとりわけ好条件であったと思われる[16]。さらに信徒の移住の社会的特徴には、先住信徒の情報提供や手引きによる移住の促進をあげることができよう。

第2の特徴は、定住後の信徒世帯の急増である。定住後に非常に高い出生率で次世代が生じ、その結果、表15のように、いずれの地区・集落の信徒世帯にも分家が創出され、地区・集落の世帯が急増する。しかし多くの信徒世帯には農地の分割相続の慣習があり、漁労等の副業や地区・集落内の新たな開墾地の存在、営農の転換等の生産手段の革新の有無によって、その創出に限界が生じる。

こうした条件不利性や営農規模によって分家創出が制約された世帯や集落から、表15のように平戸島中南部内の中心の紐差や土地のある地区・集落、新たな開拓地に移住（分家の創出）が展開したと推測できる。信徒世帯の営農志向性から、紐差への移動の増加が職業（農業）の転換よりも生産手段（小作の水田）の確保によると推測されよう。

第3の特徴は、定住後の子ども世代の増加が、平戸島中南部における分家の創出と同時に平戸島内外への他出（世帯）を生じさせたことである。平戸地区、その後の北松浦半島田平地区・平戸口地区、さらに第二次世界大戦後に佐世保市烏帽子岳に世帯単位の集団的・連鎖的移動が生じる。こうした移動地の選定では、自作あるいは小作での農業継続の可能性が要件であったといえよう。

その一方で、潜竜・大加瀬等の北松地区の炭鉱等への他出も多く生じる。こうした他出には離家離村の信徒が含まれ、「長崎近隣の古い信者共同体からさえも引き寄せた。いろいろの理由で……やってきている彼らは、司祭の方から彼らの所に行かない限り、彼らの方から司祭のもとにゆくために、何もしなかった」（パリ外国宣教会年次報告2 170頁）と高度経済成長期以降の都市移住に見られる状況が早くも出来している。

平戸島中南部における宗教コミュニティの形成の社会的特徴

第1の特徴は、紐差地区における教会や修道会の設立が、外国修道会の宣教戦略に基づく点である。実際、表17のように、紐差地区における教会の設立は、明治初期の木場地区田崎の教会・修道会の設立の5年後で、紐差での仮教会の設立の翌年には新教会が完成する。この急展開は「資力もなく、その貧しさも、極貧に近い少数の信者たち」（パリ外国宣教会年次報告1116頁）では不可能なもので、平戸島中南部の範域を超える平戸・北松地区の拠点教会として外国人司祭の主導と資金提供で紐差教会が設立されたことを物語る。信徒の手による新教会の設立は、他の小教区が独立した後の1929年まで待つことになる。

木場地区田崎に設立された修道会の維持や活動展開も外国人司祭の主導と資金援助である。この修道会は、平戸島中南部における福祉・教育活動を担うとともに平戸・北松地区における活動拠点（修道院）づくりの研修機関の役割を担っていた。

第2の特徴は、宝亀小教区の各地区・集落や紐差小教区の古田地区では、対照的に教会設立の前段階まで信徒主導であった点である。いずれの集落でも信徒によって明治初期・中期までに民家御堂が設立され、10年前後で仮教会の設立に至る。その10年～20年後の明治後期・大正期に至って、外国人司祭の主導と資金で（仮教会を経ない集落を含む）教会が設立されるのである。なおその際、宝亀地区では2つの仮教会が統一されて、中南部の新たな拠点教会が設立される。

すなわち、紐差地区以外の平戸島中南部の宗教共同体の形成の特徴は、集落を基盤にして一定段階まで信徒の主導によって展開した点、宗教共同体の形成の指標といえる教会設立の段階で、集落外の社会関係が発動し集落外の社会資源に依拠した点である。

第3の特徴は、高度経済成長期の直前・初期に平

表 18　ド・ロ神父主導の開拓移住地

地区	田平地区 旧南田平村（平戸市）	竹松地区 旧竹松村（大村市）	木ケ津（坊主畑） 旧紐差村（平戸市）
移住前の 地域状況	北松浦半島の丘陵地	大村湾岸の荒れ地	島嶼の山林原野
	すでに住民が居住し、地区・集落が存在する。	農業に適した地に住民が居住していた。農業に適さない荒れ地は開墾が必要。	明治初期、紐差村の信徒が購入した土地に五島・黒島から信徒が入植する。
移住年	1886（明治 19）年	1887（明治 20）年	1887（明治 20）年
移住世帯	黒島 3 世帯・外海 15 世帯	20 ～ 25 世帯	18 世帯 97 人
外国人司祭の役割	黒島教会と出津教会の 2 人の主任司祭による土地の購入	職業（農業）教育のための児童救護院を設立	出津教会主任司祭による土地購入
外国人司祭の 購入面積	ラゲ神父 1 町歩	10 町歩	7 町歩
	ド・ロ神父 4 町歩以上	土地の提供・小作・施設での農作業	
移住後の生産活動	農業と多様な副業 （漁業を含む）	施設の所有地での小作 施設の農地での農作業	開墾と漁労
移住地の展開	平戸口地区・西木場地区に居住の展開と新規の移住	西大村への居住の展開 丘陵地への新たな移住世帯	–
	明治～昭和初期の移住世帯は 110 世帯。昭和初期の信徒数は 2518 人	大正期に 60 世帯、昭和初期に 150 世帯	昭和 20 年代に 50 世帯、30 年代に 62 世帯
連鎖的移動	分家の創出に私費での移住や小作の世帯が加わる。	分家と新規の移住。第 2 次世界大戦後、払い下げ地や開拓地に移住世帯。	–
宗教共同体の形成	集落単位で教会を設立する。	施設内に教会設立後、2 度移転する。	紐差教会の地区の 1 つ。
	田平・平戸口・西木場の 3 つの小教区。	植松と水主町の 2 つの小教区。	木ケ津教会は 1962 年に設立

戸島中南部の周辺地域で、新たな宗教共同体が形成された点である。中野教会は外国人司祭の主導と資金、木ケ津教会は集落の信徒によるものである。この時期の教会設立は、その後の集落社会・信仰共同体の維持や公共交通の発達と関係する事象で、実際、獅子教会は廃堂、中野教会・木ケ津教会は維持と展開が分かれる。

第 4 の特徴は、宗教コミュニティ類型に関して、表 16 のように平戸島中南部の各教会は全般的に意図的コミュニティの特徴を有する点である。その一方、同業（農業）の比率の低下によって職業の多様性も生じている。

ド・ロ神父の主導の三地区―開拓移住の状況と展開

最後に、外国人司祭のド・ロ神父の主導の平戸市田平・大村市竹松・木ケ津坊主畑の 3 地区の比較を通して、木ケ津地区坊主畑の社会的特徴を明らかにしたい。

表 18 のように、外海地区出津教会のド・ロ神父の主導による 3 地区への移住は、明治中期の移住時期と 20 世帯前後の世帯の規模の点で共通する。そのうち移住時期は、外海地区の信徒数・世帯数が明治以降に誕生した世代によって急増した時期である。外海地区は、山地が海岸に迫る急峻な条件不利地区の上、「零細な田畑が子供に分割されていよいよ零細化する」（外海町史 596-597 頁）厳しい生活状況にあり、ド・ロ神父は、「零細農家の二男、三男などに独立自立の道を授けようとする目的」（外海町史 479 頁）で開拓移住を主導する。一方の 20 世帯前後の世帯の間には、同郷と信仰さらに同業（農業）という重複する関係が存在する。こうした強固な社会関係にある 20 世帯程度の世帯が、ド・ロ神父にとって宗教コミュニティを形成する最小単位であったと推測される（叶堂 2016 年 b 21-22 頁）

その一方、信徒の移住前の地域状況に関して、3 地区間に相違が見られる。すなわち田平と竹松が非信徒の居住する場所であったのに対して、坊主畑は 20 年前に信徒が移住し、さらに信徒が居住する地区・集落の周辺（約 5 km）であった点である。こうした状況の差異は、独自の宗教共同体の形成に関係があったと思われる。

さらに、開拓移住後の展開にも 3 地区間に相違が

見られる。すなわち、田平と竹松には昭和期まで新規の来住世帯があったのに対して、坊主畑には大きな移住が生じなかった点である。相違の背景として、第1に、田平・大村の開拓地には周辺に新規移住を受け入れる土地が存在したのに対して、坊主畑は土地が限定されていた点、第2に、坊主畑では職業転換が遅れたのに対して、竹松地区・田平地区では昭和期以降に両地区をとりまく地域状況が大きく変化し、非農業の世帯の居住が広がった点が指摘できよう。

なお、本稿が平成24年度～28年度科学研究費助成事業による研究（研究代表者叶堂隆三「移動と定住における類縁関係の発動と制度化に関する研究」課題番号24530641）の成果の一部であることを付記しておく。

注

（1）教会誌等で「大村」と表記されている地名は、旧大村藩領を指すものと思われる。

（2）紐差教会での聞き取りによれば、地下の仏教徒と記されている場合もそのカテゴリーには潜伏キリシタンが含まれることが多いという。なお潜伏キリシタンからカトリックへの信仰復活の場合を「回宗」、それ以外の入信を「改宗」と区別する。紐差教会での聞き取りは2016年7月、主任司祭の尾高修一神父、信徒評議会議長小山初男氏、マタラ師資料収集員会委員萩原隆夫氏に、さらに10月に尾高神父、萩原隆夫氏に実施した。

（3）『津吉村郷土誌』は手書きの資料で、刊行年および頁が付されていない。

（4）昭和初期の状況を示せば、紐差教会の幼児洗礼82人・信徒2075人、宝亀教会の幼児洗43人・信徒数944人で、それぞれの出生率は39.5人、45.6人である。いずれも同時期の日本の出生率（32.4人）を大きく上回る比率である。

（5）信徒の来住地でなかった深川地区でも、信徒数は10世帯から24世帯に増加する。

（6）引用文の「○」は不明の文字で、おそらく「森」「林」を意味する文字と思われる。

（7）本研究では、宗教コミュニティの形成の指標を教会の設立と見ている。すなわち信徒の社会（信仰）関係の制度化として、教会（教会堂や聖堂等と信徒組織）の設立をとらえている。

（8）『紐差小教区100年の歩み』の歴代主（助）任司祭の年次（「ラゲ　1866-1868年」「マタラ1868-1921年」）は、誤記の可能性が高い。

（9）大石伊勢之亟氏の親書は『紐差小教区100年の歩み』に所収されている（27-29頁）。

（10）短い期間での2つの教会の設立に関して、『マタラ師を偲ぶ』には「『100年史』と『萩原氏の手記』から推測されることはラゲ師が紐差に建てた御堂とマタラ師が建てた御堂は別のものではないかと言う疑問です。これら解明されない部分については今後の研究にゆだねることにします」（8頁）と記されている。

（11）『長崎県世界遺産「構成資産等基礎調査」地域・地区調査報告書平戸地域』は以下、『地域・地区調査報告書平戸地域』と省略する。

（12）『宝亀小教区100年の歩み』の山野教会の年表では、この山野教会を仮教会としている。

（13）この時期、深川地区・朶ノ原地区・木場地区・田崎地区・神鳥地区・木ケ津地区・大川原地区の各地区から1人、紐差地区から3人の宿老が選出されている。

（14）パリ外国宣教会のペルー神父は、外国人遊歩区域外を移動できる許可証を取得していたため、南緯代牧区の司教から外海・黒島・平戸・馬渡島の管轄を委託されている。

（15）1928（昭和3）年、子部屋はマタラ神父の死後6年間続いたものの閉鎖となる。

（16）一般に、江戸末期・明治初期における信徒の移住に信仰の保持が関係するといわれる。そうした影響は否定できないものの、この時期に所有者のない土地や隠遁地の存在は想像できない。そのため、江戸後期・明治初期の移住に条件不利地区を選択した要因には、経済的理由が大きいと推測される。また牧場地への信徒の入植は北松地区の旧松浦藩領で多く見られる。明治期が払い下げとなっているのに対して、江戸末期は入植地として藩以外の農民にも開放されたところが多い。

文献

カトリック紐差教会マタラ師資料収集委員会、マタラ師を偲ぶ、カトリック紐差教会マタラ師資料収集委員会、2016年。

カトリック俵町教会、俵町小教区50年誌―カトリック俵町教会1952～2002輪―、カトリック俵町教会、2003年。

浜崎勇、瀬戸の十字架―田平のキリシタン100年の歩み―、田平カトリック教会、1975年。

紐差村小学校編纂、紐差村郷土誌、1918年。

平戸婦人会西の久保支部郷土研究クラブ、西の久保小史、1973年。

100周年誌編集委員会、宝亀小教区100年の歩み、宝亀カトリック教会、1985年。

市山・前田・松永・岩崎編、紐差小教区100年の歩み、1982年。

板橋勉、聖サヴィエルと平戸切支丹、新興芸術社、1949年。

亀渕吉太郎、平戸大河原郷土史、大河原老人明寿会、1984年。
叶堂隆三、平戸市北部への移住と宗教コミュニティの形成、下関市立大学論集152号、2015年ａ。
――、平戸市田平地区における宗教コミュニティの形成と展開、下関市立大学論集151号、2015年ｂ。
――、産炭地における宗教コミュニティの形成―長崎県北松地区への移住と平戸小教区の形成―、やまぐち地域社会学会13号、2015年ｃ。
――、第2次移住地への移住とコミュニティの形成―長崎県北松地域褥崎地区―、下関市立大学論集150号、2015年ｄ。
――、佐世保市への移住と宗教コミュニティの形成、下関市立大学論集153号、2016年ａ。
――、大村市への移住と宗教コミュニティの形成、下関市立大学論集154号、2016年ｂ。
片岡弥吉、ある明治の福祉像―ド・ロ神父の生涯―、日本放送出版協会、1977年。
木村・藤野・村上編、藩史大辞典第7巻九州編、雄山閣出版、1988年。
記念誌編集委員会、信仰告白125周年―黒島教会の歩み―、黒島カトリック教会、1990年。
前津吉尋常高等小学校・古田尋常小学校共編、津吉村郷土誌。
松村菅和・女子カルメル修道会、パリ外国宣教会年次報告1（1846-1893）、聖母の騎士社、1996年
――、パリ外国宣教会年次報告2（1894-1901）、聖母の騎士社、1997年。
長崎県教育委員会、長崎のカトリック教会（長崎県文化財調査報告書第29集）、長崎県教育委員会、1976年。
長崎県知事皇室世界遺産担当、長崎県世界遺産「構成資産等基礎調査」地域・地区調査報告書 平戸地域、2008年。
お告げのマリア修道会、黒島修道院100年の歩み、お告げのマリア修道会、1980年。
――、紐差修道院100年の歩み―愛苦会からお告げのマリア会まで　お告げのマリア修道会　1980年。
津吉ふれあいクラブ・津吉地区郷土史調査研究委員会、津吉地区郷土史、2003年。
浦川和三郎、切支丹の復活 後篇、日本カトリック刊行会・帝国書院、1928年。
山頭亀一、きりしたんの村―木ケ津教会―、私家版、1978年。
吉田収郎、平戸中南部史稿、藝文堂、1978年。